

比恵42

－比恵遺跡群第91次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第898集

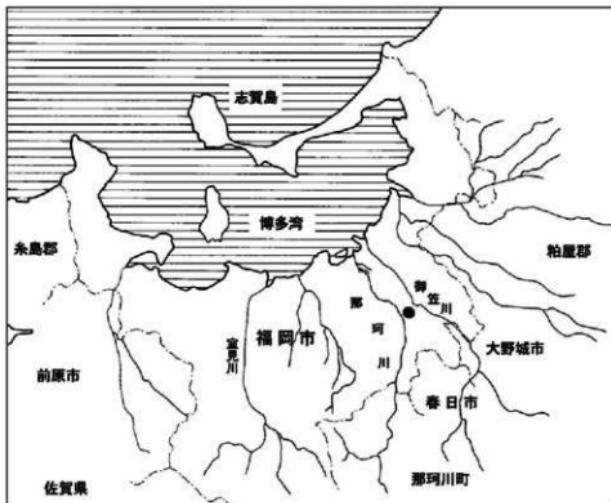
2006

福岡市教育委員会

比恵42

—比恵遺跡群第91次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第898集



調査番号 0401
遺跡略号 HIE-91

2006

福岡市教育委員会



(1) 包含層から出土した小形仿製鏡



(2) 小形仿製鏡の出土状況



(1)包含層から出土した把手付壺形土器



(2)把手付壺形土器の出土状況

序

福岡市の博多区は、弥生時代『奴国』の中心地域として、学史的に有名な国史跡板付遺跡を初めとして、数多くの重要な埋蔵文化財が包蔵されている地域です。また比恵遺跡群が所在するこの地域は、都市の再開発が著しく進んでいる地域でもあり、それによる発掘調査が盛んに行われています。

今回報告する比恵遺跡群は、市内でも有数の弥生時代遺跡であり、また古代の「那津官家」の推定地として国指定されているなど、市内でも最も重要な遺跡の一つです。

今回の報告は平成16年度に実施した第91次調査地点の発掘調査のもので、民間で個人の共同住宅建設に伴って実施したものです。調査では弥生時代から古墳時代前期初め頃の集落跡と谷部に厚く堆積した包含層を調査しました。包含層の調査では大量に出土した在地土器の他に、国内の他地域からもたらされた土器や朝鮮半島系の土器、小形仿製鏡や把手付逆形土製品など貴重な発見がありました。

本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助となるとともに、学術研究、文化財保護の普及啓発活動においても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、事業主の武末隼次郎氏をはじめとして、施工業者の上村建設株式会社など関係各位のご協力に対して、厚く感謝の意を表します。

平成18年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 植木とみ子

例　　言

- (1). 本書は、福岡市教育委員会が平成16年(2004)度に福岡市博多区博多駅南4丁目168番1・2で、費用を一部国庫補助と原因者負担の民間受託で実施した、比恵遺跡群第91次調査区の発掘調査報告書である。
- (2). 発掘調査は上記の主体により行われ、調査の担当は山崎龍雄が行った。
- (3). 遺構実測は山崎龍雄、藤野雅基が主体となって行い、また遺物の実測は山崎、上方高弘、横溝舞、常松幹雄(福岡市埋蔵文化財センター)、楽浪系土器は寺井誠氏(財団法人大阪市文化財協会)が行った。
- (4). 弥生時代終末から古墳時代初期の土器の分類・整理については埋蔵文化財課の久住猛雄の協力を受けた。時期編年についても同氏編年によっている。(久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相『庄内式土器研究』XIX」)
- (5). 本書に使用した図面の作成は山崎、境聰子、大久保玲子、大賀順子、松尾信子が行った。
- (6). 遺構の撮影は山崎が行い、出土遺物の撮影は上方、把手付壺形土器・小形仿製鏡については常松が行った。
- (7). 本書に使用した方位は磁北であり、真北とは $6^{\circ}18'$ 西偏する。
- (8). 調査に係る記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
- (9). 本書の執筆・編集は山崎が行ったが、包含層出土小形仿製鏡、把手付壺形土器については常松幹雄、楽浪系土器については寺井誠氏に原稿をお願いした。

凡　　例

- (1). 本報告では土器の口径・器高・底径などの法量については、紙面の都合から実測図横に数値を記載している。
a : 口径　　b : 底径　　c : 器高　　(数字) は復元数値
- (2). 弥生時代終末から古墳時代前期初頭の外来系の土器については、系統を実測図横に下記のように記号で例示している。
B : 伝統的V様式　　C : 庄内式系　　D : 布留式　　E : 山陰系　　S : 製塩土器

本文目次

第I章 はじめに	
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
第II章 遺跡の立地と歴史的環境	
1 遺跡の立地と歴史的環境	3
第III章 調査の記録	
1 調査の概要	4
2 遺構と遺物	5
(1) 第1面の調査	6
(2) 第2面の調査	6
(3) 第3面の調査	14
(4) まとめ	36
第IV章 考察	
1 把手付壺形土器	37
2 小形彷製鏡	38

挿図目次

Fig. 1 調査区周辺の遺跡(1/50,000)	2
Fig. 2 調査区の位置(1/4,000)	3
Fig. 3 第1面全体図(1/200)	5
Fig. 4 第2面全体図(1/200)	6
Fig. 5 第3面全体図(1/200)	7
Fig. 6 調査区土層図(1/60)	9
Fig. 7 SC07-13-16(1/80)	10
Fig. 8 SX12-17(1/80)	11
Fig. 9 SK08~10-26-27(1/40)	12
Fig. 10 溝・各土坑出土土器(1/4)	15
Fig. 11 各住居跡出土土器①(1/4・1/5)	16
Fig. 12 各住居跡出土土器②(1/4・1/5)	17
Fig. 13 整地面SX01・土器群SX12出土土器(1/4・1/5)	18
Fig. 14 土器群SX12出土土器(1/4・1/6)	19
Fig. 15 SX17出土土器①(1/4)	20
Fig. 16 SX17出土土器②(1/4)	21
Fig. 17 SX17出土土器③、SX18、SX25出土土器①(1/4)	22
Fig. 18 SX25出土土器②(1/4・1/5)	23
Fig. 19 SX25出土土器③(1/4)	24
Fig. 20 包含層出土土器①(1/4)	25
Fig. 21 包含層出土土器②(1/4)	26
Fig. 22 包含層出土土器③(1/4・1/5)	27
Fig. 23 包含層出土土器④(1/4・1/5)	28
Fig. 24 各遺構出土土製品(1/3)	29
Fig. 25 各遺構出土石器①(1/3)	30

Fig. 26 各遺構出土石器②(1/3)	31
Fig. 27 各遺構出土石器③(1/3)	32
Fig. 28 各遺構出土石器④(1/3)	33
Fig. 29 各遺構出土朝鮮半島系土器(1/3・1/6)	35
Fig. 30 包含層出土把手付壺形土器(1/3)	37
Fig. 31 小形彷製鏡実測図(2/3)	38

図 版 目 次

- 巻頭図版 1 (1)包含層から出土した小形彷製鏡 (2)小形彷製鏡の出土状況
 巷頭図版 2 (1)包含層から出土した把手付壺形土器 (2)把手付壺形土器の出土状況
 PL. 1 (1)第1面 I区全景(北から) (2)SX01(北西から)
 PL. 2 (1)SX01近接(北西から) (2)SX01遺物出土状況(西から)
 PL. 3 (1)第2面 I区全景(南から) (2)調査区北側(東から)
 PL. 4 (1)第3面 I区全景(南から) (2)II区全景(南東から)
 PL. 5 (1)第3面 I区北側(南から) (2)SC07・16(北東から)
 PL. 6 (1)SC13(東から) (2)SX12・17(北東から)
 PL. 7 (1)SC16(西から) (2)SK14(南西から) (3)SK08(北西から) (4)SK09(北から)
 (5)SK10(南から) (6)SK26・27(東から)
 PL. 8 (1)SX12(東から) (2)SX12遺物出土状況(南東から) (3)SX25(北から) (4)SX25土器出土状況(西から)
 (5)柱穴SP06柱出土状況 (6)SX12土器出土状況
 PL. 9 (1) I区北壁土層(南から) (2)SC13南壁土層(北から) (3)各遺構出土朝鮮半島系土器
 PL. 10 各遺構出土土器

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成15(2003)年7月25日に株式会社瑞穂不動産より、福岡市博多区博多駅南4丁目168番1・2における埋蔵文化財の事前審査願(受付番号15-2-380)が福岡市教育委員会に提出された。申請地は比恵遺跡群の北側に位置し、周囲は発掘調査が実施されている地域であったので、事前調査を実施し遺構の有無を確認することとなった。既存建物解体後、埋蔵文化財の試掘調査を実施し、遺構を確認したので、開発に先立っては埋蔵文化財の記録保存が必要であるとして、申請者の瑞穂不動産、地権者の武末筆次郎氏らと協議を行った。協議の結果、事業計画が個人の共同住宅であることから、発掘調査費用は原因者の負担ではあるが、一部を国庫補助対象として国庫補助金を適用して、記録保存の為の調査を実施することとなった。

発掘調査は平成16年4月1日から開始したが、当初の予想以上に大量の土器を含む包含層などの埋蔵文化財が検出されたため、原因者側と協議を行い、ご理解を得て当初の調査期間を延期することとなり、6月4日迄行った。整理作業は平成17年度に実施した。

調査にあたっては、地権者の武末筆次郎氏、申請者の株式会社瑞穂不動産、施工業者の上村建設株式会社などの様々な方々に協力を受けた、記して感謝の意を表します。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査委託者 武末 筆次郎

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財課長 山口 讓治

事務担当 埋蔵文化財課調査第2係長 池崎 謙二

文化財整備課管理係 御手洗 清(旧) 鈴木 由貴(現)

調査担当 埋蔵文化財課主任文化財主事 山崎 龍雄

調査作業 井上一雄、井上利弘、井上英子、大橋由美子、岡部安正、北原由紀子、黒瀬千鶴、佐藤アイ子、田中茂孝、堤 正子、野口リウ子、別府俊美、安高邦晴、安高精一、山下嘉人

整理作業 上方高弘、河野摩耶、境 聰子、井上朝美、宮坂 環、横溝 舞

調査にあたっては埋蔵文化財課第2係の荒牧宏行の協力を受け、また整理にあたっては、福岡市埋蔵文化財センター常松幹雄、埋蔵文化財課第1係の久住猛雄の協力を受けた。

第91次調査の概要

遺跡略号	調査番号	地番	申請面積	調査面積	調査原因	調査期間	調査担当
HIE-91	0401	博多区博多駅南4丁目168番1・2	792m ²	378m ²	共同住宅	2004.4.1~6.4	山崎龍雄



1. 比東道跡群 2. 那珂道跡群 3. 那珂君体道跡 4. 板付道跡 5. 路岡道跡 6. 五十川高木道跡
 7. 井尻道跡群 8. 博多道跡群 9. 堅粕道跡群 10. 吉塙道跡群 11. 吉塙本町道跡群 12. 福岡城
 13. 三宅廻寺 14. 野多目道跡 15. 曰佐道跡群 16. 須玖道跡群 17. 野多目佔波道跡

Fig. 1 調査区周辺の遺跡 (1/50,000)

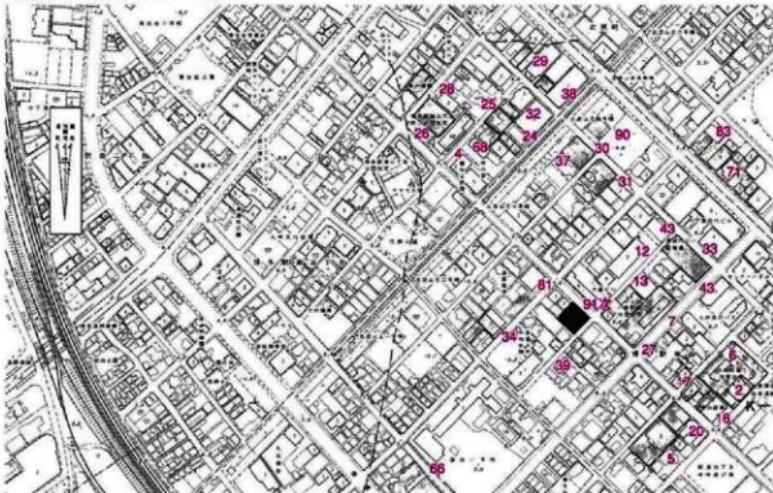
第Ⅱ章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地と歴史的環境

立地と自然環境 比恵遺跡群が所在する福岡平野は、西は背振山塊から派生する長垂丘陵、東は宇美川・三郡山地に囲まれた地域で、南北に派生して博多湾に注ぐ室見川・樋井川、那珂川・御笠川、宇美川・須恵川・多々良川などの中小河川の沖積作用によって形成された沖積平野と、油山北部台地・鴻巣丘陵や諸岡台地・精屋台地などの丘陵・台地部とによって構成される平野である。この平野はまた地域的に西から早良平野・福岡平野・精屋平野とに細分される。ここで言う福岡平野は那珂川と御笠川・月隈丘陵に囲まれた部分を指す。

歴史的環境 比恵遺跡群は、この狭義の福岡平野の北側、那珂川と御笠川に挟まれた標高5~11mを測る平坦な洪積台地上に立地する遺跡である。この台地は阿蘇山起源とされるASO-IV火碎流によって形成されたものである。ただ現在見られる平坦な地形は昭和10年代に行われた区画整理によって削平された結果であり、本来は台地を開析する小河川が入り組んだ台地という景観を呈していたものと思われる。今回報告する第91次調査区は比恵遺跡群の北側で、試掘や周辺の調査成果から微高地の周縁部から谷部に立地することが分かっていた。

比恵遺跡群は南側に続く那珂遺跡群と共に、北部九州を代表する弥生時代集落で、奴園の中心集落の一つである。那珂・比恵遺跡群は本来一体化してもよい遺跡群であり、両遺跡群を合わせた総面積は140万m²を測る。1934~35年にかけて土地区画整理事業に伴って、鏡山猛氏らによって最初の調査が行われるなど、学史的にも著名な遺跡である。遺跡としては旧石器時代から中世迄の複合遺跡であるが、遺跡群が大きく発展するのは弥生時代からである。また古墳時代から古代にかけては、遺跡の北側一帯に大型建物構造群が検出され、「日本書紀」にある「那津官家」との関連が考えられ、その重要性から平成13年には国史跡に指定されている。遺跡群の東側には古代の大宰府から延びる西海道の道路跡なども検出されている。また、南に隣接する那珂遺跡群では前期古墳の那珂八幡古墳や後期の劍塚古墳など大型の前方後円墳が遺存しており、比恵遺跡群でも第6・36次調査などで古墳の周溝などが調査されている。



第三章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig.3~6)

本調査区は比恵遺跡群の北側に位置し、標高は地表面で約6mを測る。調査区周辺では北側に第81次、東側に第7・13次、南東側に第39次調査などが行われている。本調査区一帯の小字名は「池田」である。調査区は廃土処理の関係から東西二分割した。調査は西側のI区から開始し、反転してII区の調査を行った。I区は3面の調査を実施した。第I区の基本層序は次の通りである。堆積土は地形が東側に向かう谷部にあたるため、東ほど厚く下傾する。I区調査区北壁の土層では、地表面から厚さ0.8~0.9mの真砂土質土と、その下0.2m程が近代迄の水田土。更にその下が厚さ0.05~0.1m程の遺物を含む包含層で、その境が弥生時代中期から古墳時代後期までの土器や須恵器細片をびっしり敷詰めた整地面(第1面)となる。第1面では溝を検出した。整地面の下は包含層で、厚さは西側で0.1m、東側で0.7m程となる。包含層は大きく上層黒褐色粘土、下層黑色粘土(粒子が密で粘性が強い、腐植土質)に分かれる。この境界が第2面となる。深さは整地面下0.1~0.2m程である。第2面では竪穴住居跡や土坑、ビットなどを検出した。第3面は鳥栖ロームから八女粘土の基盤面で、西から東側に緩やかに傾斜し深くなる。深さは地表下1.25~1.8mとなる。この面では土器群やビットなどを検出したが、残りは悪く、第2面からの可能性がある。II区はI区南側と東側の部分であり、時間の都合から、南側I区の続く台地部と東側谷部包含層の調査を行った。包含層は第2面に続く面で土器が集中する部分を検出した。包含層からは弥生時代中期初頭から古墳時代前期の遺物が出土した。基本的には下ほど古くなる。出土遺物はコンテナで約400箱ほど出土した。大半は包含層出土である。遺物のなかには朝鮮半島系や畿内系など外来系の土器、珍しい把手壺形土器、小形彷彿鏡などがある。

紙面や整理期間の都合、筆者の力不足などで、充分な整理が出来ず報告出来なかった重要な遺物もあることをお断りしておきたい。

2. 遺構と遺物

(1) 第1面の調査 (Fig.3、PL.1)

I区南側~II区にかけて大きな建物基礎攪乱などが入る。検出遺構は整地面と溝状遺構である。

①溝状遺構

SD05 SD06に並行する小溝、残りは悪い。確認長さ6m、幅0.6m、深さは最大で0.05m程である。埋土は褐色味の強い黒褐色粘質土で、弥生土器片などが少量出土している。

SD06 調査区南西側 主軸を略西北西方向に台地麁を湾曲して延びる小溝。確認長さは15m、幅0.6~0.7m、深さ0.1~0.14mを測る。埋土は褐色味の強い黒褐色粘質土である。埋土上面には土器片があり、整地面以前の溝である。

出土遺物 (Fig.10~24) 弥生土器が大半であるが、2点須恵器細片が出土しており、古墳時代後期か。1は脚部で、二次焼成を受ける。古墳前期初頭の製塙土器。2は両端が開く器台。表面は摩滅し調整不明だが内面シボリ痕残る。

256・257は土製投弾。長さ3.7~4.0cm、径2.2~2.4cmを測る。調整はナデ。

②SX01整地面 (Fig.3、PL.2)

I区の北側で検出した弥生土器や古墳時代土師器、少量の須恵器などの細片を敷詰めた整地面で、上面には砂が混じり硬く締まっていた。重機による表土除去の際に部分的に剥げてしまった部分があ

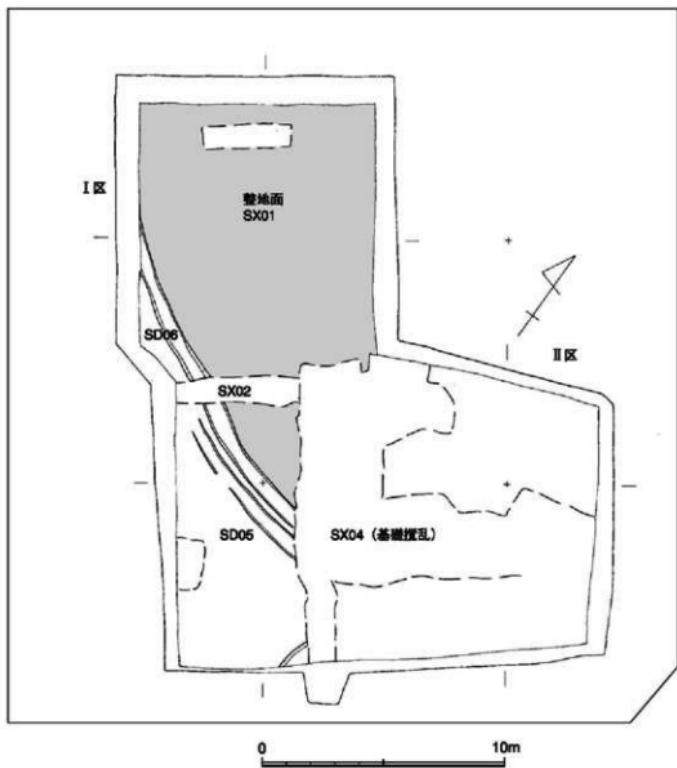


Fig. 3 第1面全体図 (1/200)

るが、ほぼ面は描っていた。西側台地ほど土器片が大きく密であるが、東側に移るにつれて小さく、やや疎らになる。整地面の幅は最大で10m程であるが、II区では整地面の綻きは攪乱などによるのか、明瞭に確認出来なかつた。

出土遺物 (Fig.13-24-25, PL.10) 弥生土器が大半であるが、少量古墳時代土師器や須恵器を含む。58-59は須恵器。58は高坏脚部で須恵期編年のIV期のものか。回転ヨコナデ調整。焼成やや軟。59は縦体部細片。外面櫛描き波状文で、円孔の一部が残る。60は弥生土器高坏の脚筒部を転用した櫛羽口片。径は4.8cmを測る。内部に鉄滓が詰まる。色調は赤褐色で二次的に焼けて硬質化している。61は摩滅欠損する古墳時代の把手。62-64は高坏脚部。62-63は外来系で伝統的V様式系。62は中実で、表面は摩滅する。63は円形透孔がある。64は湾曲して開く脚部。2か所円形透孔がある。65は庄内系の小型器台の脚部で2か所の円形透孔がある。66-67は鉢。66は楕円形の鉢。67は底が尖る形態。65-66とも表面は摩滅する。68-69は平底の鉢。68はV様式系で、表面は摩滅するが、69は外面叩き痕が残る。弥生後期前半。70は脚部が張る小型の完形の短頸壺。内外面ハケメ調整。韓半島(慶



Fig. 4 第2面全体図 (1/200)

尚南道)の巾着形壺の模倣か。71は庄内系の二重口縁壺口縁で、口縁下部に円形竹管文が付く。72は筒形器台の口縁と底部。表面は摩滅し、調整は不明。

238~244はラグビーボール形の土器投弾。長さは3.2~4.7cm。調整はナデ。245~246は土製円板。245は土器片打ち欠きで直径3.0×3.4cm、孔径0.35cmを測る。246は紡錘車で、鉄滓が付着する。径3.6cm、厚さ1.4cm、孔径0.4cmを測る。247~249は土製サジ。いずれも破片。250~251は焼成粘土塊。粘土を折り曲げて整形している。長さ10.1cm・10.8cm。

S1は小形の扁平片刃石斧。傷みが酷い。残長6.8cm。S2~S3は石庖丁片。S4は円孔を持つので石庖丁の可能性がある。S5~S7は砥石片。いずれも使用により摩耗が著しい。S8~S9は滑石製円板形紡錘車。半存で径5.4cm・5.0cm。S10は軽石製の浮子と思われるが、明瞭な紐掛けの抉りはない。S11~S14は凹石・磨石。いずれも扁平な橢円形を呈し、上面・底面に叩き使用の擦みと側面に磨り痕や叩き痕が明瞭に残る。長軸長は10~13cm。S14は嚴石。表面には擦り痕や叩き使用痕が明瞭に残る。

(2) 第2面の調査 (Fig. 4, PL. 3~6)

① 穴住居跡

SC07 (Fig. 7, PL. 5) I区西側SD05・SD06の下で検出した。当初溝状遺構と考えたが、掘り進



Fig. 5 第3面全体図 (1/200)

むうちに、深さが浅く、底面が平坦であることから、住居跡と判断した。北側にSC16、南側にSC13があるが、SC16に切られ、南側のSC13とは境が明瞭でないが、調査時の観察でSC13よりは新しいか。住居の規模は推定で長軸長約8m、短軸長は5.2m、深さは最大で0.25mを測り、規模は大きい。南東壁際には長方形を呈す幅1.2~0.5m、高さ0.05~0.1mの黒色粘土と橙色地山粘土混合土の高まりがあり、ベッド状造構かと思われる。床面は貼り床であったようで、床面は汚れ、浅い落込みがある。床面には浅いピットはあるが、明確な柱穴は確認出来なかった。炉も不明。

出土遺物 (Fig.11-25・26・27) 遺物量は多いが、弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の土器が出土している。久住編年のI B期か。21~23は壺。21は直立口縁の小型丸底壺、庄内系か。調整は外表面ヘラミガキ、内面はナデ。22はやや扁球気味の庄内系無頸壺胴部。23は広口の壺。1/2片で、表面は摩滅するがハケメが残る。24~26は壺。24は口縁部片。頸部に×字状の刻目突帯が付く。調整は内外面ハケメ。25は口縁部1/9片。頸部に刻目突帯が付く。口縁内外面ハケメ後横ナデ。26は下胴部片。鋸歯状刻目の付く扁平な貼付突帯が付く。調整は粗いハケメ。27~28は鉢。27は底の深い椀形で、摩滅し調整は不明。28は手捏ねのミニチュア土器。29は大型の台付壺底~脚部か。調整は外表面細かいハケメとナデ。東海系の可能性がある。30~31は器台上半部。30は1/3片。口端部にはヘラによる刻目が付く。調整は体外面叩き後ハケメ後ナデ。31は外表面ハケメ後ナデ、内面ハケメ後板ナデ。252は土製投弾。長さ3.1cm。ナデ仕上げ。253は紡錘車で、径3.5×3.8cm、厚さ1.7cm、孔径0.6

cm。ナデ調整。254はサジ把手。長さ6.7cmで、指押え仕上げ。

S15は石剣先。残存長5.6cm。表面丁寧な研ぎ。S18は滑石製有溝石錐。現存長6.7cmを測る。S20は石剣未製品を石斧に転用しようとしたものか。全長15.0cmを測る。研磨と側面には二次加工痕が残る。S21は磨石か敲石。表面には使用擦痕と、敲打による瘤みが残る。

SC13 (Fig. 7、PL. 6・9) SC07の南側で検出。上層にSK14が切り込む。調査時にはSC24と切り合うとしたが、同一の住居と考える。規模は幅4.1m、深さは南壁で0.5mを測る。埋土は上層が暗褐色粗砂混じり粘質土で、その下は黒褐色粘質土が主体となり、炭化物や土器片を多く含む。西壁際には幅0.6m、高さ0.05mの地山粘土貼り付けのベッド状造構が残る。また床面は貼り床で、それを撤去すると西～北側にL形に曲る浅い落込みがあった。北側は深さ0.2mを測るが、西側は平面確認のみで深さは不明。この土坑の埋土は、鈍い橙色ロームブロックに黒褐色粘土を少量混入。

出土遺物 (Fig.11-12・24～26、PL.10) 弥生時代後期から古墳時代前期初頭 (I B～II A期) の遺物が出土している。SC24としたものも含めて報告する。32・33は複合口縁壺。いずれも小片で、調整はヨコナデ。32は山陰系の搬入品で草田5期か。33は吉備系の搬入品か。34は長頸壺。外面ハケメ、内面はナデ。35は広口の壺1/6片で胴部は扁球。調整は外面ハケメ、内面はナデ。36はV様式系又は西部瀬戸内系の壺頸部で、羽状文状の刻目突帯が付く。内外面ハケメ調整。37は壺肩上部で、外面ナデ調整であるが、貼付け浮文がある。38～40は壺。38は庄内窯で大和型。外面叩き調整。縦向2式後半。39はほぼ完形。底部に僅かに平底を残す。外面叩きで、内面ハケメ後ナデ消し。胴部に焼成後の径4×5cmの梢円形穿孔がある。40は頸部に三角突帯が巡る。1/4片で、内外面ハケメ調整。41～43は高杯。41は庄内系の高杯で、摩滅し調整不明。42は丸みを持つ杯部で、杯部内外面ヘラミガキ。山陰系草田6期の搬入品。土層ベルト出土で、SK14に伴う可能性があり。43は口縁が内湾する杯部。北近畿か東海系か。44は庄内系の小型器台。杯部ヘラミガキ、脚部ハケメ。四方透孔である。古相の形式。45は製塙土器脚部。調整はナデ。46は庄内系の脚台付鉢。脚部でヨコナデ調整。47は手捏ね鉢。ほぼ完形である。48はコップ形土器底部片。調整は横ナデ。49は外反する口縁を持つ鉢。外面ナデ後ヘラミガキ、内面はナデ。50は器台口縁部で、外面叩き後粗いハケメ。内面ナデとハケメ。51は鼓形器台。調整は外面横ナデ、内面はケズリ。作りは良く、出雲地域からの搬入か。草田5～6期。52は支脚天井部。調整は外面ハケメ、内面横ナデで、天井部に径0.7cmの円孔がある。53は支脚。調整は口縁部横ナデ、体外面板ナデ。54はタコ壺形土器。ナデ調整。胎土は在地系か。他に米浪系土器などが出土している。

255は投弾。長さ3.6cm、径1.9cmを測る。丁寧なナデ。

S16・S17は磨製石剣。S16は剣先。S17は基部で両側に円孔がある。S19は砥石か。全長18.4cmを測る。各面使用擦痕が残る。

SC16 (Fig. 7、PL. 7) SC07を南側で切る住居跡で、南側にコーナーを持つ。確認規模は長軸で4.5m以上、深さ0.1mを測る。床面は汚れて凹凸があり平坦でない。埋土はSC07に近い。出土遺物から古墳時代初頭のII A期のもの。

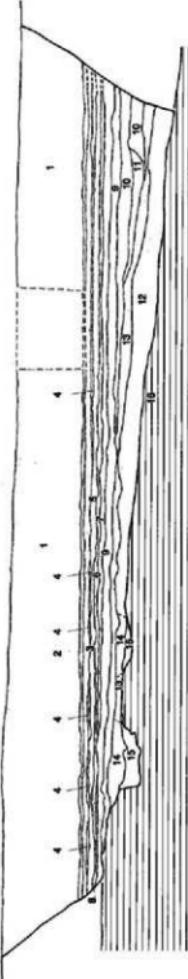
出土遺物 (Fig.12) 55は古墳初頭の二重口縁壺。摩滅がひどいがハケメとナデ。56は鉢口縁部1/6片で、摩滅がひどいがハケメ。57は僅かに平底。ナデ又はミガキ調整。

②土坑

SK08 (Fig. 9、PL. 7) SX01下で検出し、包含層・SX17を切る。長軸長2.2m、最大幅1.06m、深さ0.74mを測る。底面は平坦であるが、北側が一段下がる。壁面はやや崩れるがほぼ直立する。

北端土層

L=6.60m



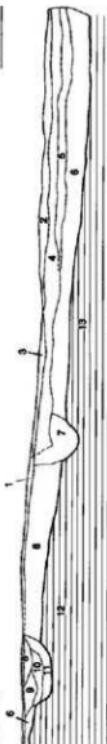
1号ベルト土層

L=6.30m



2号ベルト土層

L=5.40m



南端土層

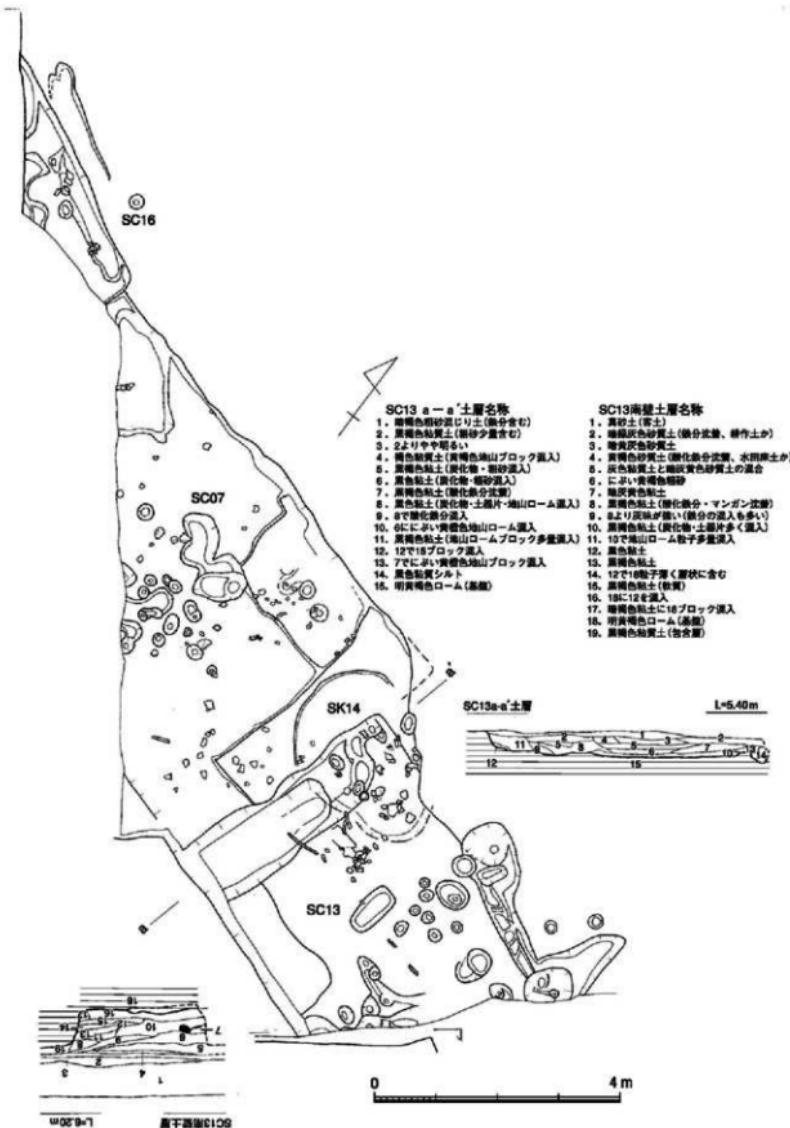
L=6.30m



4 m

1号ベルト
2号ベルト
3号ベルト

Fig. 6 調査区土層図 (1/60)



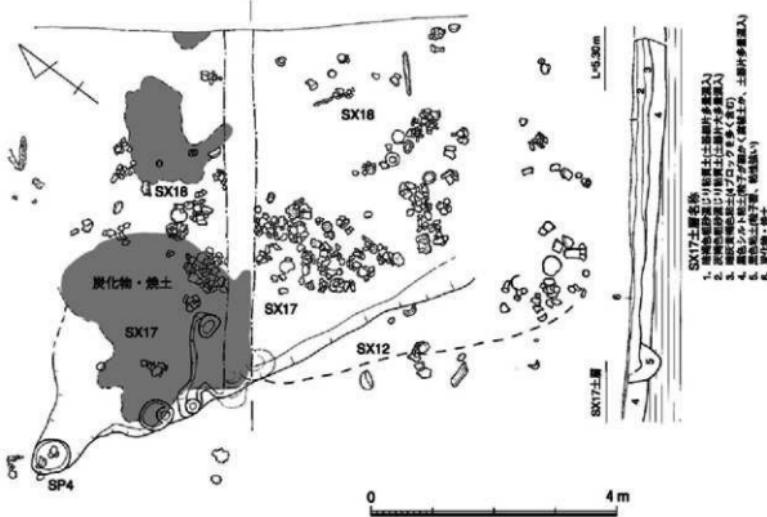


Fig. 8 SX12-17 (1/80)

埋土は上層が暗褐色粘土、下層は軟質のオリーブ黒色粘土で、湧水がある。

出土遺物 (Fig.10) 弥生時代前期後半から古墳時代前期初頭迄の遺物を多く含むが、ほとんどが包含層・SX17からの流入遺物で、遺構の時期を確定しない。3は外折する弥生後期の甕口縁部で、内外面ハケメとナデ調整。4は外反する口縁を持つ壺。調整はヨコナデ。黒斑がある。V様式系又は庄内系で古墳初頭。5は古墳前期前半の布留系甕口縁細片。胎土・焼成は良好。

258は投弣。長さ 3.8 cm、径 2.1 cm を測る。丁寧なナデ。

SK09 (Fig. 9, PL. 7) I 区北西側で検出した梢円形状土坑。規模は径 1.0 × 0.8 m、深さ 0.4 m。埋土は黒色粘土と黄褐色粘土ブロックである。遺構自体は黒色の包含層下層を切っている。

出土遺物 (Fig.10) 弥生時代中期の土器が出土している。6は弥生中期後半の甕口縁部細片。摩滅で調整不明。7は甕底部。僅かに上底で弥生中期中頃。

SK10 (Fig. 9, PL. 7) I 区北壁に一部がかかる円形土坑。長径は 1.1 m 以上、深さ 0.4 m を測る。埋土は地山ロームブロック混じりの黒色または黒褐色粘土。上層には土器群があった。

出土遺物 (Fig.10-24) 弥生時代中期前半～後半の遺物が出土。8は弥生中期中頃の鋸先口縁細片。調整はヨコナデ。9は高杯。弥生中期後半頃のもの。10は逆し字形口縁の壺。摩滅で調整は不明。

259は土製紡錘車。径 3.5 × 3.7 cm、厚み 1.1 cm、孔径 0.6 cm を測る。指圧痕が残る。

SK14 (Fig. 7, PL. 7) SC07とSC13の上面で検出した梢円形状を呈すと思われる土坑。平面形状は梢円形であるが、北側SC07部分では埋土がほとんど住居跡と差がなく、やや正確さを欠く。確認規模は長軸長 3 m、幅 2 m、深さは土層ベルトで 0.3 m を測る。南側で古墳前期初頭頃の土器がまとまって出土した。

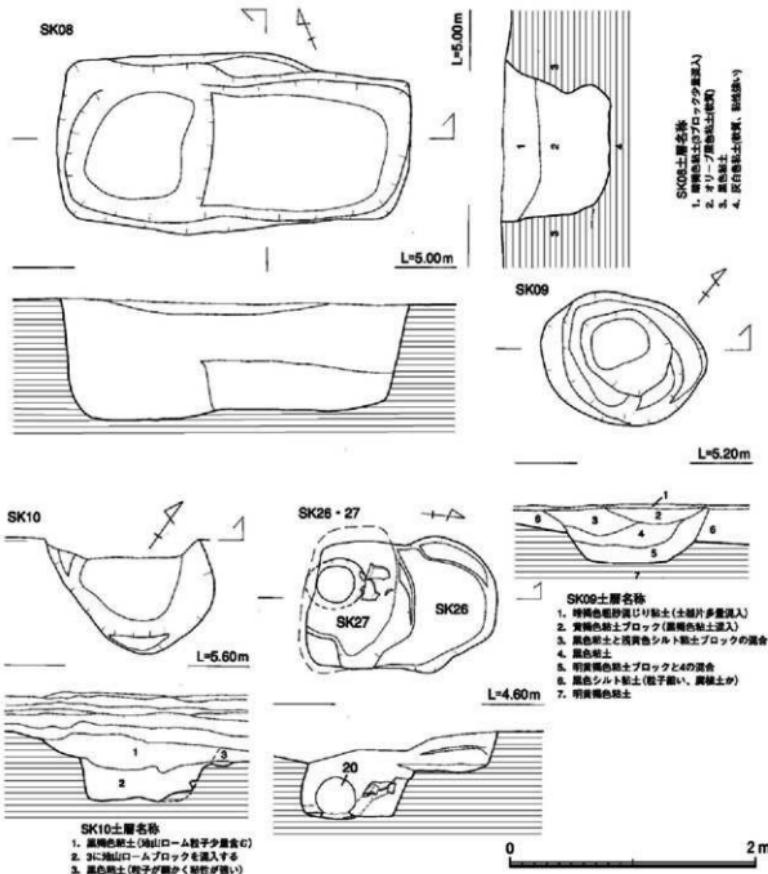


Fig. 9 SK08~10・26・27 (1/40)

出土遺物 (Fig.10, PL.10) 弥生土器片と古墳時代前期初頭 (II A期) の土器が出土している。11は庄内模倣窓で外面肩上半は叩き、下半はハケメ、内面はヘラケズリ調整。12は古墳前期初頭のV様式系の壺。調整は外面叩き後ナデ、内面ヘラケズリ。庄内窓を模倣。13は口縁が短く外折する手捏ねの鉢。14は高杯脚部。脚外面はハケメ、内面は摩滅し不明。

③土器群

SX17 (Fig.8, PL.3・6) I 区北側包含層中層上面、SX01を撤去し、包含層上層を掘下げた段階で検出した。輪郭は明瞭に確認出来なかったが、赤みがかった黒褐色粘土から暗灰褐色粘土で焼土炭化物などを含む層が面的に広がり、又、完形に近い土器がレベルを描えて集中的に出土したことや、

土層ベルトでもSX12を切る落込みが認められたので、住居跡の可能性を考えた。しかし柱穴や炉跡などは無く、断定は出来ない。

出土遺物 (Fig.15~17・24・25、PL.10) 弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭（ⅠB～ⅡA期）の遺物が出土。90～102は壺。91～96は古墳前期初め。90は直立気味口縁を持つ。外面ハケメ、内面底部はハケメ。91は外面叩き後ハケメ、内面ハケメ後ナデ。92～95は二重口縁壺。92・93は山陰系壺で、胎土は在地。93の調整は横ナデ、胴内面はヘラケズリ。94はV様式系技法による山陰系壺の模倣品で口が窄まる形態。調整は胴外面摩滅するがナデ、内面ヘラケズリ。95は円形浮文・竹管文が付く庄内系二重口縁壺細片。96～102は弥生後期の壺。96は外面粗い縦ハケメ、内面粗い横ハケメ。口縁外面ヘラ状のもので、山形文様が付けられる。在地系か。97は口縁を欠損する伝統的V様式系の小型壺。調整は内外面ハケメ。98の器表面は摩滅するがナデ。99は胴部で、調整は内外面ハケメ。100は僅かに平底を持つ。器表面は摩滅するが粗いハケメとナデ。101は古墳前期初頭の在地系二重口縁壺で、調整は摩滅するがナデ。102は丹塗り研磨の壺頸部で突帯と貼付浮文が付く。内面の調整はナデ。103～111は弥生終末から古墳初頭の壺。103はほぼ接合完形。調整は外面ハケメ、内面ヘラケズリ。104は小型壺で全体摩滅するが、調整は外面叩き、内面はナデ。103・104はV様式系か。105・106は筑前型庄内甕で古相型式ⅠB期。107は筑後型庄内甕で、調整は外面細い叩き、内面ヘラケズリ。河内型に似るが小郡市津古生掛古墳に類似あり（河内型の筑後北部での生産）。108は河内型庄内甕の搬入品。外面右上がり叩き、内面はヘラケズリ。河内の庄内Ⅲ式。109・110は布留式甕。109の調整は外面ハケメ、内面はヘラケズリ。筑前型庄内甕の布留傾向型。110は西部瀬戸内系布留式甕で、外面煤が付着し、摩滅するがナデ、内面はヘラケズリ。備後沿岸か。111は吉備系の二重口縁甕。口縁部に数条の凹線を巡らす。112は広口の大型甕。外面叩き、内面ナデ。113は弥生後期前半頃の甕。調整は外面ハケメ、内面ナデ。114～116は高杯。114・115は古墳前期初頭の庄内系高杯。同形態で全体に摩滅がひどいが、115の脚部はヘラケズリ。脚部に円孔が4方と3方ある。116は弥生後期終末期で、脚部に二段の三方透孔がある。調整はハケメ。117はV様式系技法の作りで、伽都の爐形土器の模倣品か。調整は磨滅し不明。118～120は庄内系の小型器台。118・119の脚部には4方の円形透孔が入る。118の器壁は外面摩滅、内面ハケメ。119・120は庄内系の古相の器台で、119の調整はハケメ後ナデ。120は脚部で復元脚径9.4cmを測る。調整はナデ。121・122は窓口の支脚。121は受部径8.0×5.3cmを測る。調整は外面ハケメ、内面はナデ。122は脚部一部欠損。受部径9.3×5.5cmを測る。調整は外面叩き後ナデ、内面はナデ。123は口縁が袋状を呈する器台。調整は内面ハケメ。124・125は山陰系の脚台付鉢。胎土は在地か。124は脚から鉢部。125は脚部で、124の調整はナデ。126～130は鉢。126は口縁が内傾する。調整はハケメとナデ。127は深底、外面ケズリ、内面指ナデ。小型甕の可能性あり。128は手捏ねで形が歪む。表面指押痕が残る。129は底部に孔を持つ鉢。調整は外面叩き、内面板ナデ。130は底部が平底で、調整は外面ヘラケズリ、内面ナデ。129・130はV様式の鉢。131はミニチュアの鉢。手捏ねである。132・133は製埴土器脚部。総体としてⅡA期土器が主体であるがⅠB期も多く含む。

263は土製投弾で長さ4.5cm、最大径2.4cmを測る。ナデ仕上げで、作りは良い。264は杓子か鉢の把手。摩滅が進むが手捏ねである。

S30は磨製石剣茎部片。丁寧な研磨仕上げ。

SX18 SX17東側、SK08の北側で検出した。SX17と同一遺構の可能性がある。

出土遺物 (Fig.17) 134は古墳前期初頭の壺。口縁部1/2片で調整はナデ。135は鉢。表面はやや摩滅するが、調整はナデ。136は細い器台。調整はハケメ、内面はナデ。

SX25 (PL.8) II区北東側で包含層中に検出した土器集中部。弥生時代後期から古墳時代前期初頃迄の土器が混ざる、後で報告する楽浪系土器なども出土している。

出土遺物 (Fig.17~19-26, PL.10) II A期を主体とし、I B ~ II B期も含む。137~145は古墳前期初頭頃のもの。137は小型丸底壺。調整はナデ後ミガキ。138・139は外に聞く長頸気呂の直口壺。調整は138がナデで、胴内面はケズリ、139はナデとハケメ。140は丸底壺。表面は摩滅するが、内面はナデ、胴部はヘラケズリ。141は吉備系の二重口縁壺。口縁外面には櫛描凹線文が入る。調整は外ハケメ、内面はヘラケズリ。吉備系壺はいずれも搬入品。142・143は頸が縮まる壺。調整は142が外ハケメ、143は外ハケメ、内面ハケメ後ナデ。144は頸部に山形刻目台形突帯と下脇に台形突帯が巡る、ほぼ完形の長胴壺。器壁は摩滅するが、内面はナデで工具痕を残す。145は弥生終末豊前高島式の複合口縁壺。口縁端部には網目状刻目が付く。調整は外テハケ後ナデ、内面はナデ。146は在地系の複合口縁壺(最新型式)。調整は横ナデ。147は戯内系の二重口縁壺の頸部片。148・149は壺。148は筑前型庄内甌の新相(II B期)で、調整は外叩きで内面はヘラケズリ、149はII A期の筑前型庄内甌で、頸部は指ナデ。150~157は高杯。150は脚筒中実のV様式系高杯。調整は外ハケメとナデ。151は吉備系の有段高杯。調整はハケメ後ナデ。152は庄内系の有段高杯。調整はナデ。153は脚部。調整はナデとハケメ。円形の四方透孔が入る。154の調整は内外面ハケメ。脚部に円形の四方透孔がある。155是在地系で、調整はハケメとナデ。156は庄内系の低脚高杯。調整は外縁ハケメ、内面ナデ。157の調整は外ナデ、内面ハケメ。158~160は小形器台。158は口縁が面取り状に僅かに立上る庄内系で、調整はハケメ後ナデ。159はV様式系で158~160を模倣した稚拙な模倣品。調整は内外面ハケメ。160は庄内系古相の單口縁である。調整はハケメとナデ。161~165は鉢。椀形161・162と口縁部が屈折する形態163~165に分かれる。161・162の調整はナデ。163は底深で調整はナデ。胎土は精良。164は精製の小型丸底鉢で、器表は摩滅する。163・164は庄内系の精製品。165は僅かに口縁が外折する。調整は外細かいハケメ、内面は粗いハケメ後ナデ。166是在地系塊状小形高杯で、外細かい横ハケメ、内面はナデ調整。167は大型の脚台付鉢で雑な作り。調整は外ナデ、鉢部内面はケズリ。二次の焼成を受け、製塙土器の可能性あり。

S31は漁労具の浮子か。軽石であるが、明瞭な加工痕は不明瞭。長さ・幅は7.0×5.6cm。S32は敲石。長さ7.9cm、表面は磨りで上下両端に敲打使用痕がある。

(3) 第3面の調査

① 土坑

SK26・27 (Fig. 9, PL. 7) 北側が丸く、南側が方形を呈し、2基の土坑が重複する。北側SK26が南側SK27を切る。またSK27部分は攪乱を受ける。2基の土坑を合わせた規模は長軸長1.22m、最大幅0.83m、床面迄の深さはSK26で0.23m、SK27で0.42m、南側のSK27が深くなる。SK27の西壁は奥に抉れ、底面はピット状に深くなる。埋土は黒色粘土である。遺物は主にSK27部分で多く出土している。

出土遺物 (Fig.10, PL.10) 古墳前期前半(II C期)の土器が出土。15~17はSK26出土。15は壺。1/5片で、調整は外ハケメ、内面ヘラケズリ。調整が難で、在地系の新しいものか。16・17は手捏ねのミニチュア壺、いずれも口縁部を欠く。18~20は古墳前期の布留式系壺。18は完形。19は1/4片で胴外ハケメ、煤が付着。内面ヘラケズリ。胎土精良、焼成良好。20はほぼ完形。胴外面は叩き後ナデとハケメ、内面はヘラケズリ。胴部に焼成後の穿孔が2ヶ所ある。

② 土器群

SX12 (Fig. 8, PL. 8) I区SC07東側、台地斜面低地部に落込むように検出された。SX17に切られる。弥生時代中期中頃から中期末頃迄の土器群である。特殊器台や瓢形土器など丹塗り土器もあり、祭祀遺構の可能性がある。主体としては須玖II式の新相が中心。

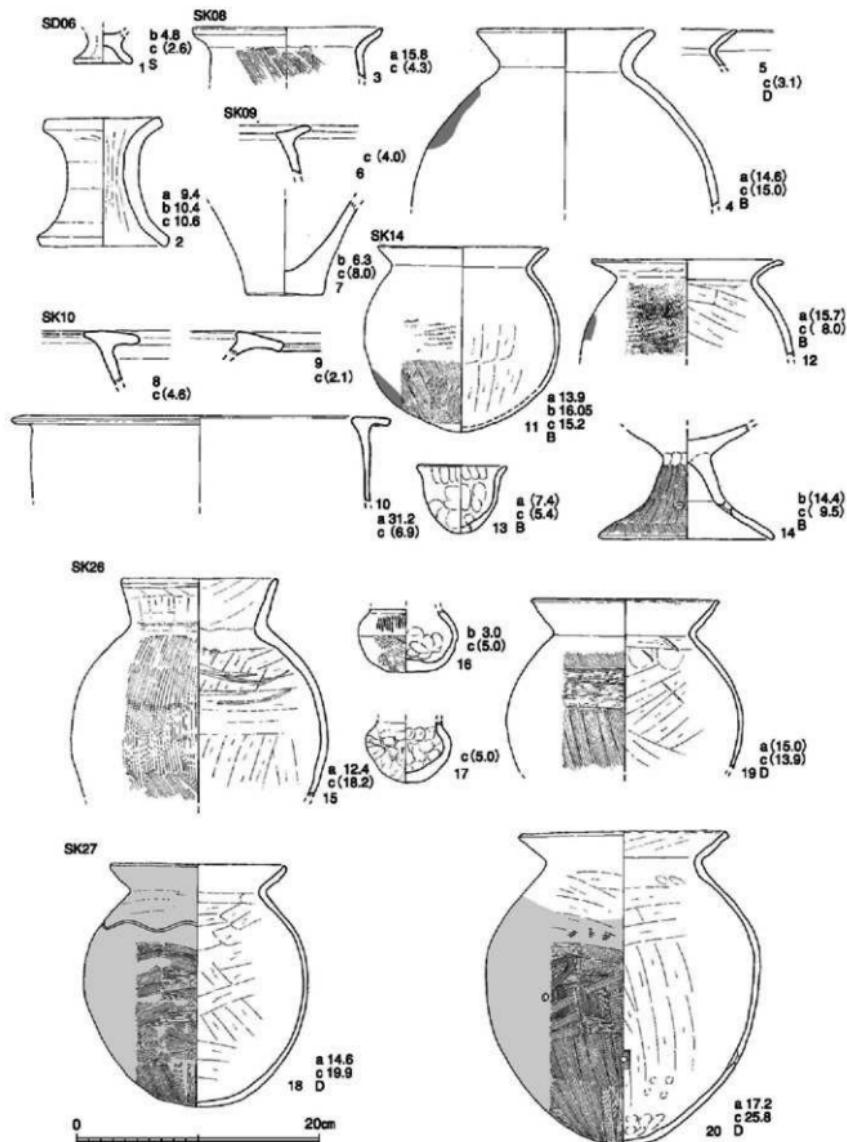
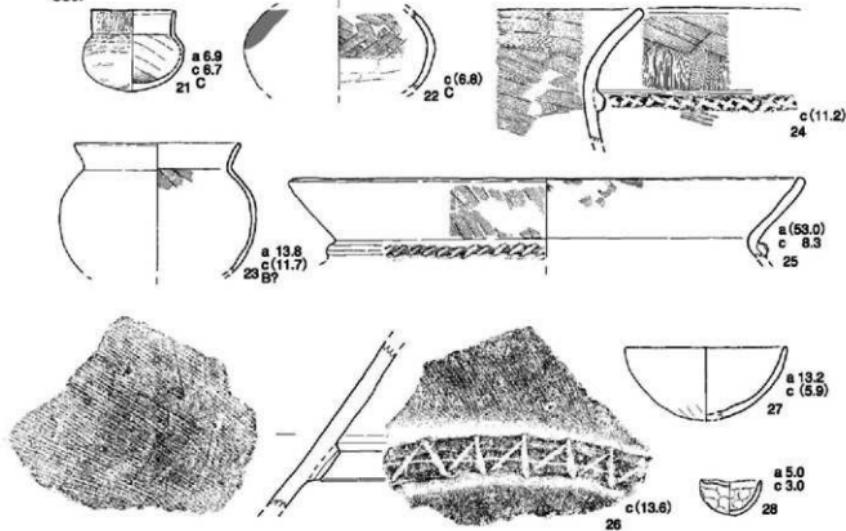


Fig. 10 溝・各土坑出土土器 (1/4)

SC07



SC13

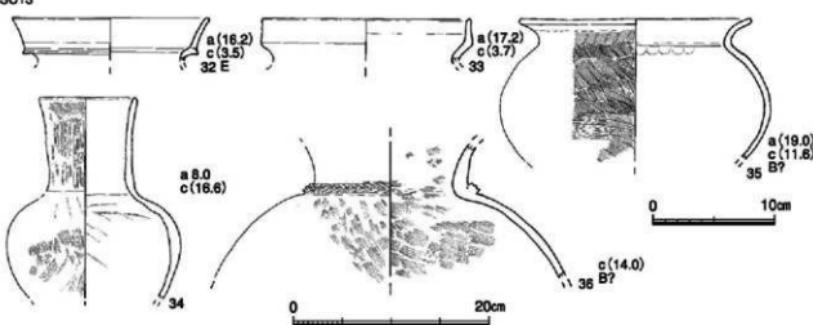


Fig. 11 各住居跡出土土器① (1/4・1/5) ※25・36は1/5、他は1/4

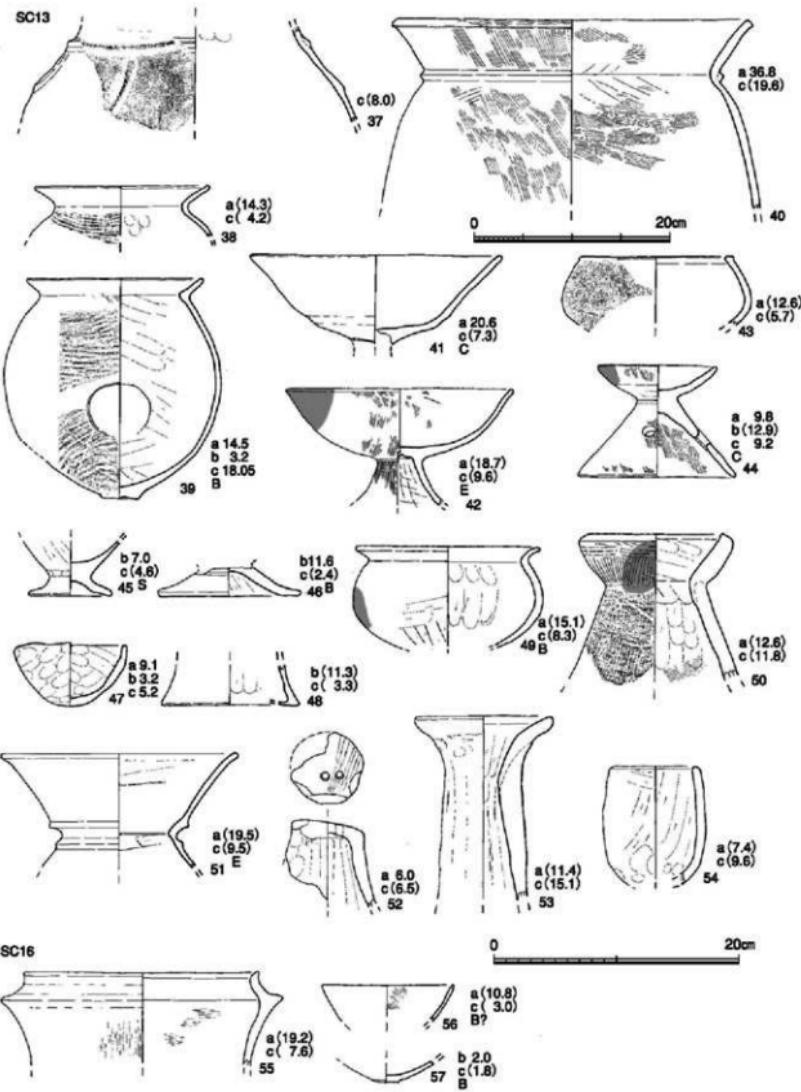


Fig. 12 各住居跡出土土器② (1/4-1/5) ※40は1/5、他は1/4

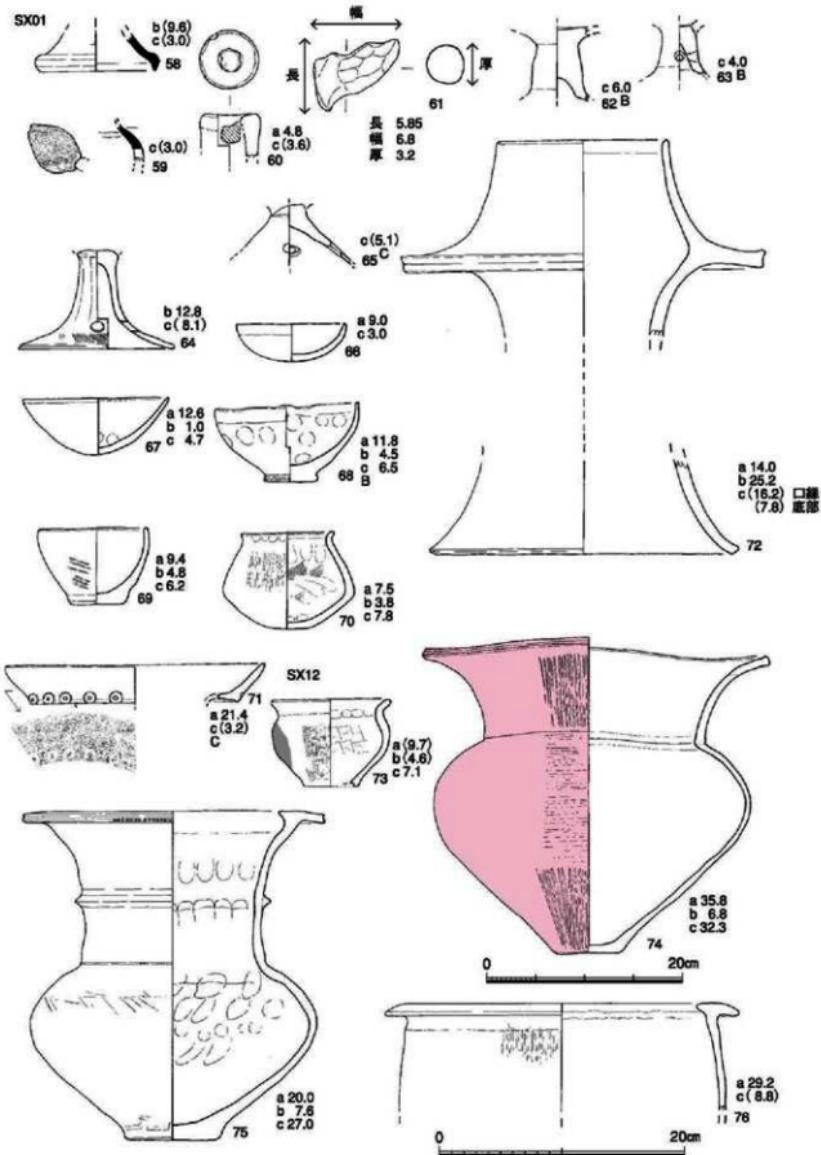


Fig. 13 整地面SX01・土器群SX12出土土器 (1/4・1/5) ※74は1/5、他は1/4

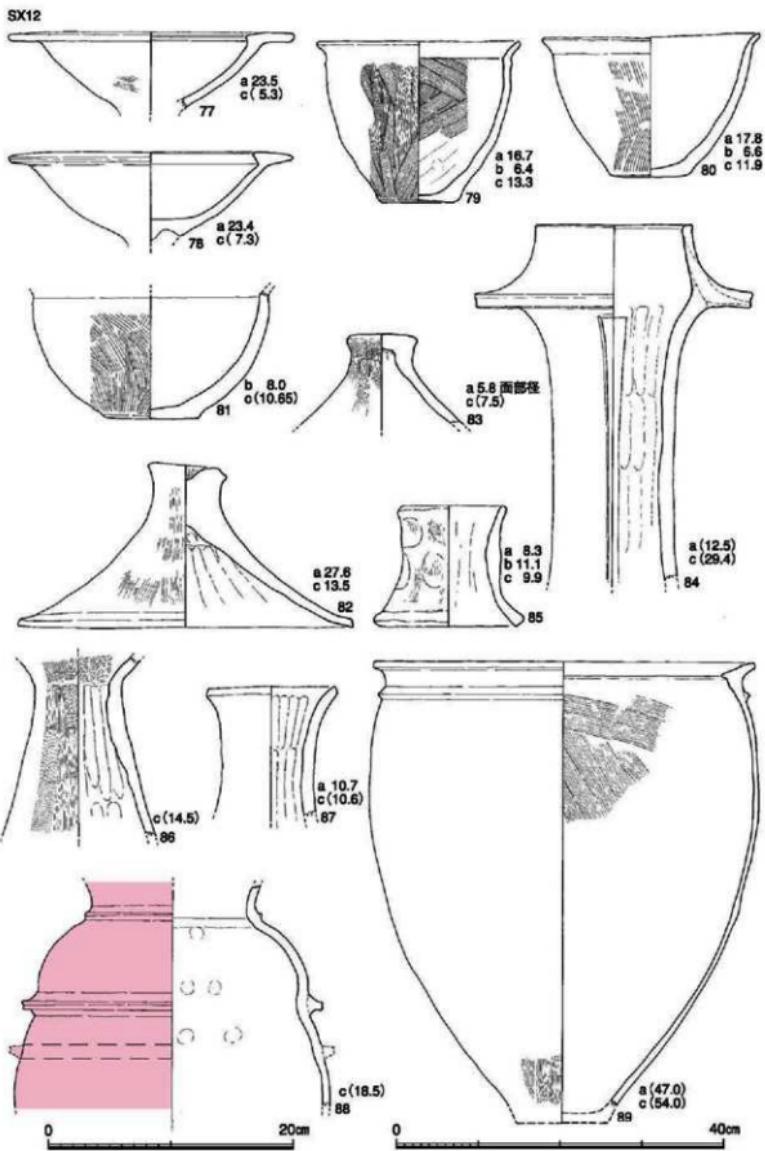


Fig. 14 土器群SX12出土土器 (1/4・1/6) ※89は1/6、他は1/4

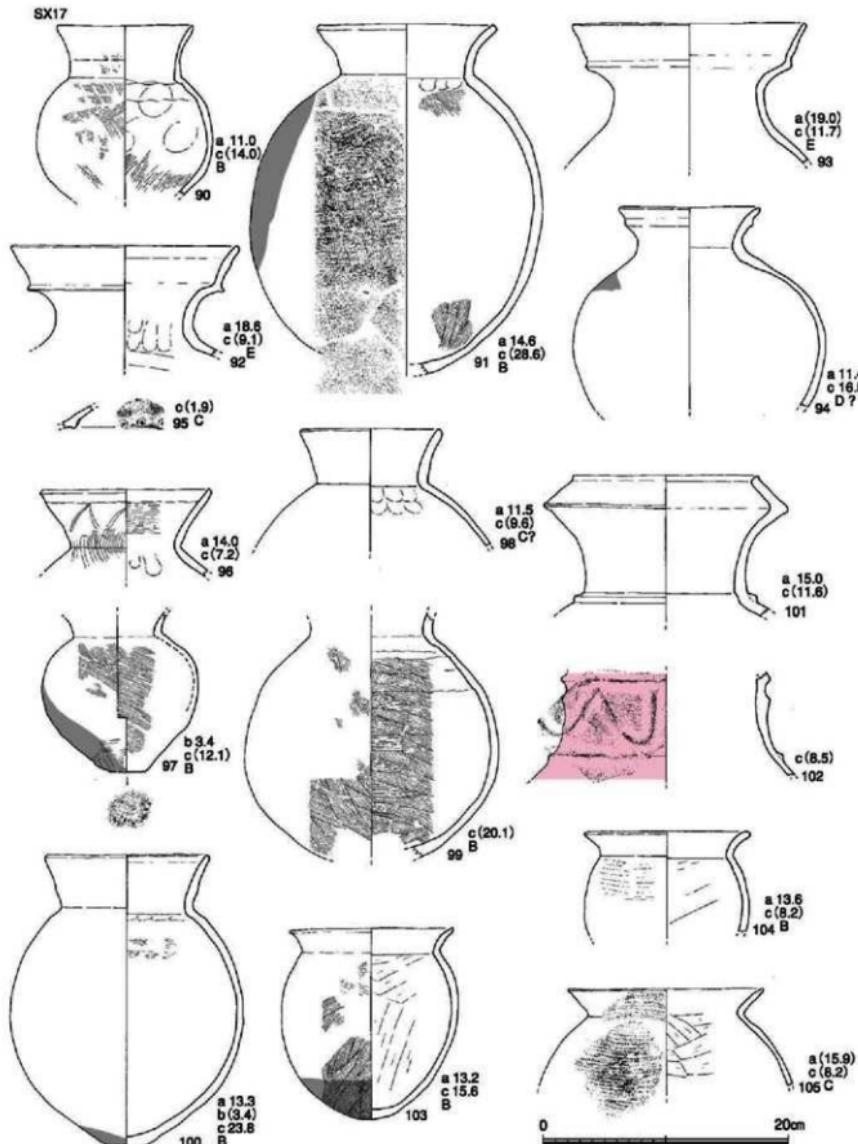


Fig. 15 SX17出土土器① (1/4)

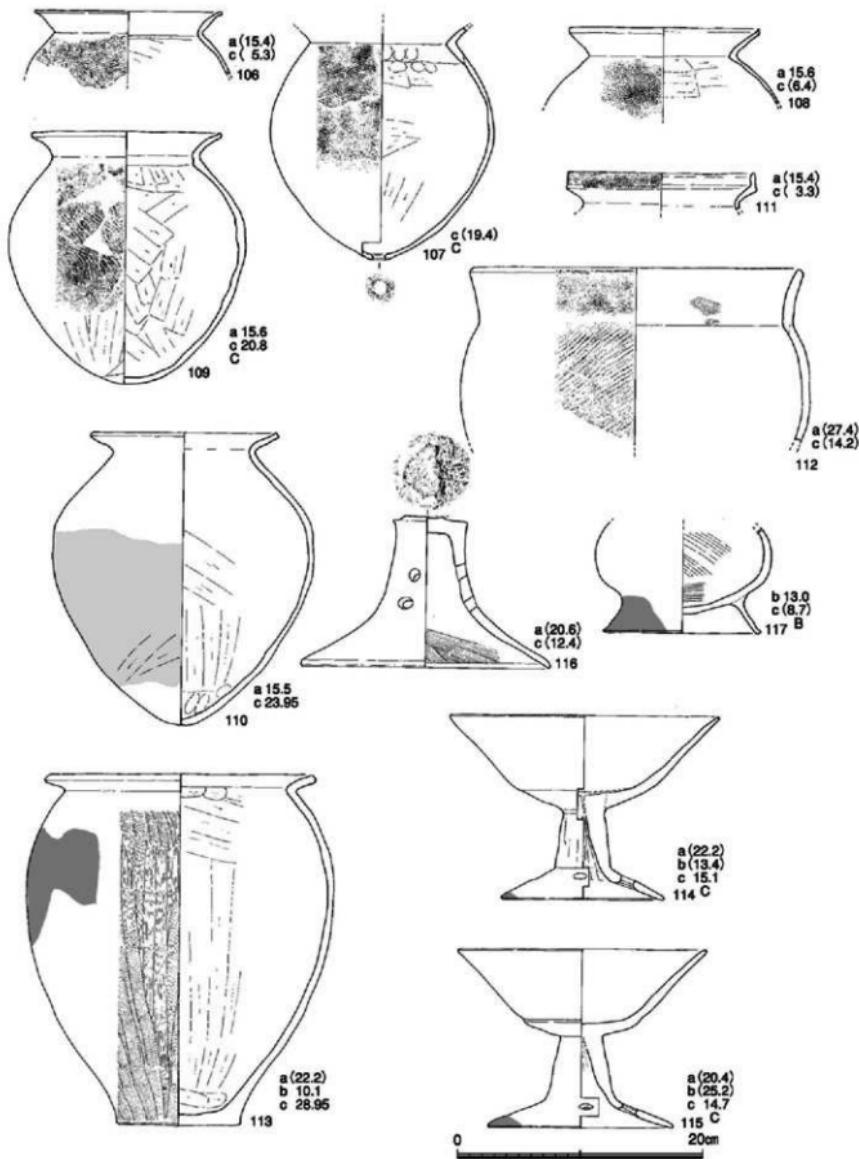
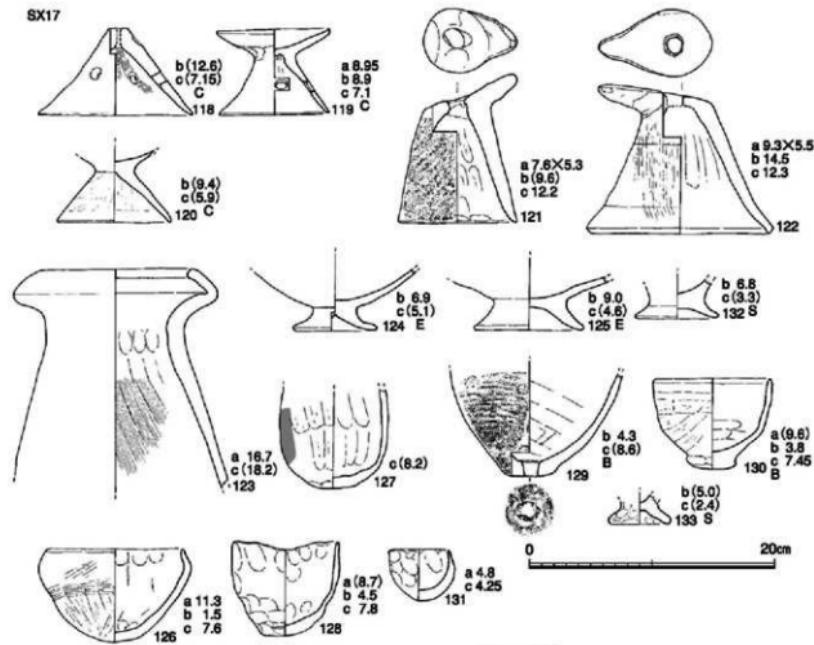


Fig. 16 SX17出土土器② (1/4)

SX17



SX18



SX25

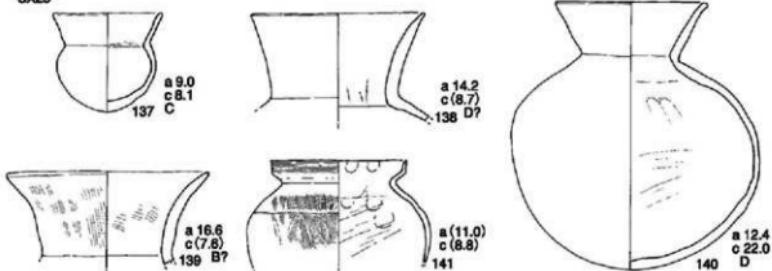


Fig. 17 SX17出土土器③、SX18、SX25出土土器① (1/4)

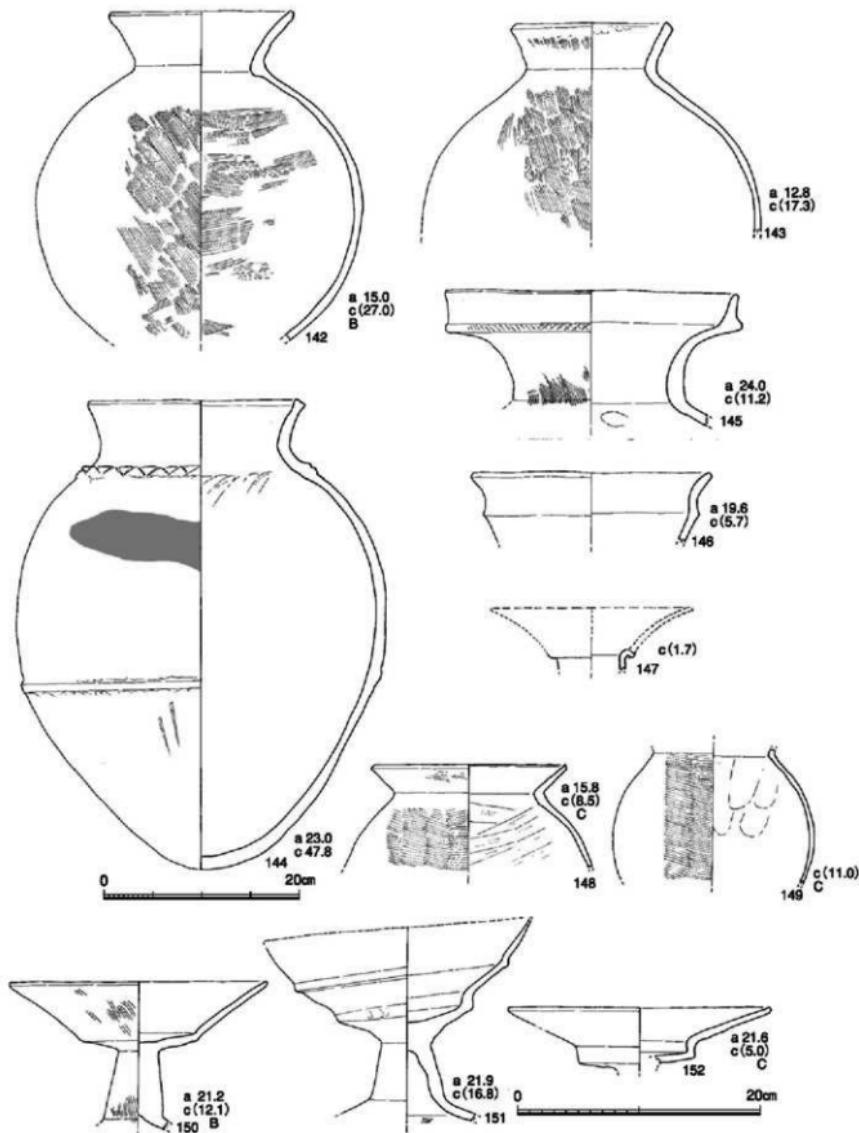


Fig. 18 SX25出土土器② (1/4・1/5) ※144は1/5、他は1/4

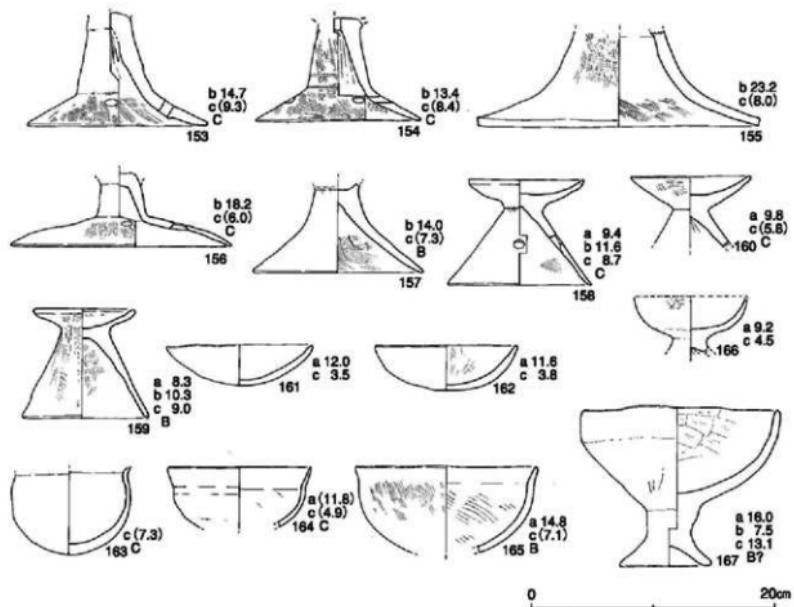


Fig. 19 SX25出土土器③ (1/4)

出土遺物 (Fig.13-14・24-26、PL.10) 73は弥生中期後半の小型壺。調整は外面ハケメ、内面ナデ。74は丹塗りの広口壺。歪みがある。外面ヘラミガキ、内面はナデ。75は効先状口縁の広口壺。口縁端部に刻目が付く。調整は外面板ナデ、内面ナデ又は指ナデ。76は弥生中期中頃の壺で、表面は摩滅が著しいが外面ハケメ。77-78は弥生中期中頃～後半の高杯坏部。調整は76がヘラミガキ、78は摩滅するが丹塗り痕残る。79～81は口縁が外折する鉢。79の調整は内外面ハケメ。80の器面は摩滅するが、外面ハケメ。81は口縁を欠くが、外面粗いハケメ、内面はナデ。82・83は壺。82は天井部で径5.8cmを測る。いずれも外面ハケメ、内面ナデ。84は筒形器台。鰐下に長方形透孔が入る。表面摩滅するが外面ヘラミガキ、内面ナデ。85～87は器台。85は完形の低い器台。受部径8.3cmを測る。表面摩滅するが、外面ハケメ。86は口縁の屈折が強い。外面ハケメ、内面指ナデとハケメ。87は口縁が外反して開く。外面ハケメが残り、内面はナデ。88は瓢形土器。2条の突唇が巡る。外面ナデで丹塗りである。89は中期後半の大型壺。表面は摩滅するがハケメとナデ。

260-261は土製投弾。長さは3.8cm、2.8cmを測る。調整はナデ。262は土製サジ。手捏ね仕上げである。

S22は磨製石斧。刃部は欠損する。残存長10.4cmを測る。S23～S25は石庖丁。S23は完存で、全长9.8cm、孔間幅2.7cmを測る。使用で摩滅している。S24・S25は破片で、S23の紐孔の仕上げは雑。S26～S29は調理具。S26は磨石片。残存長10.8cmで、表面磨り使用や敲打痕が残る。S27は磨石か敲石。上面は磨られ、上下端に敲打使用痕が明瞭に残る。S28-S29は凹石。表面は磨られるが、上

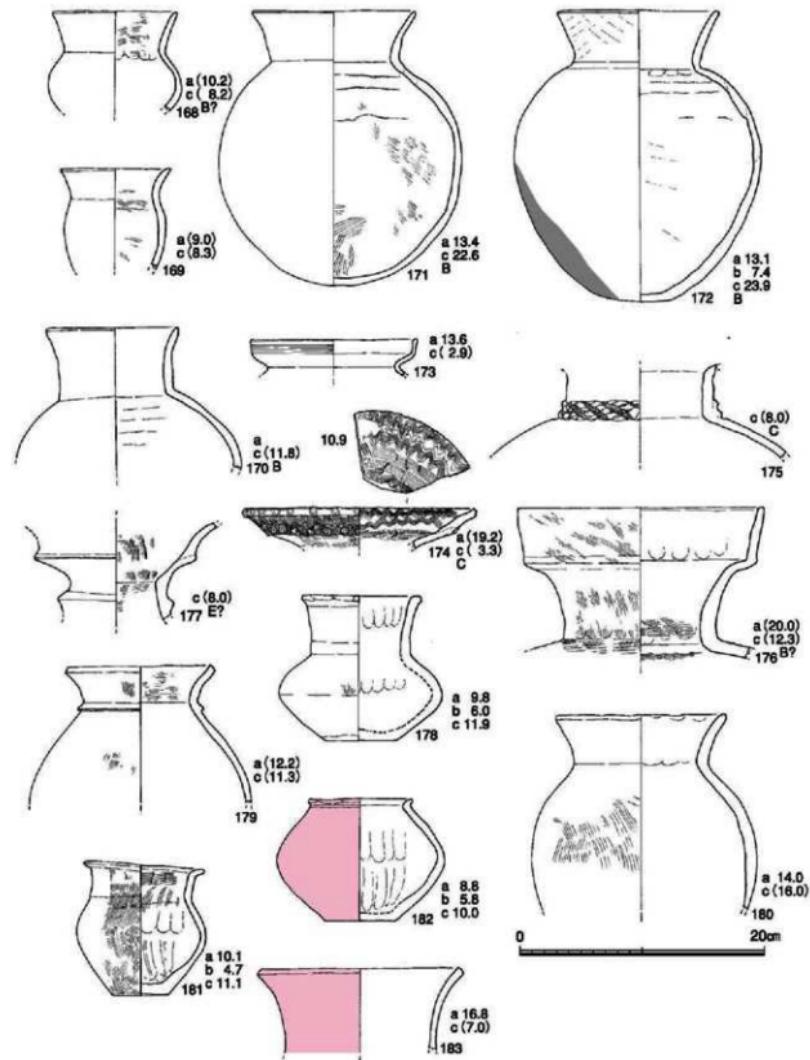


Fig. 20 包含層出土土器① (1/4)

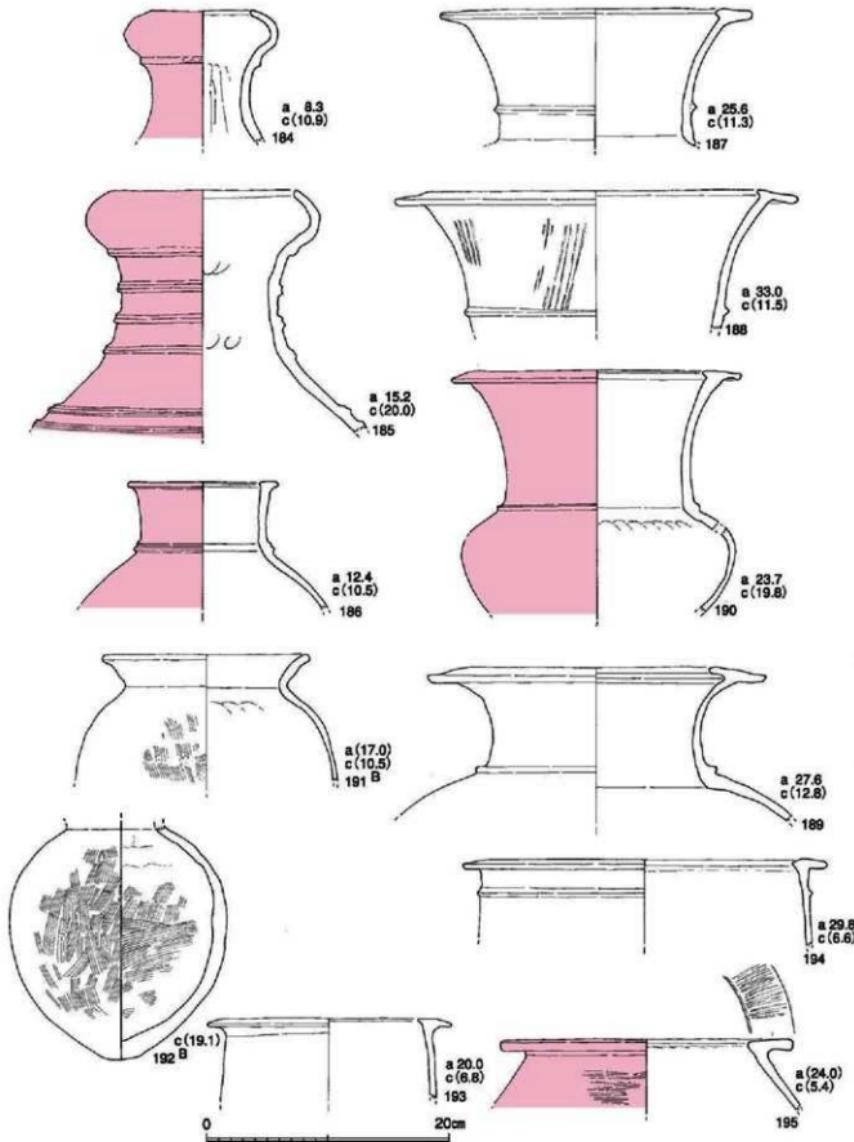


Fig. 21 包含層出土土器② (1/4)

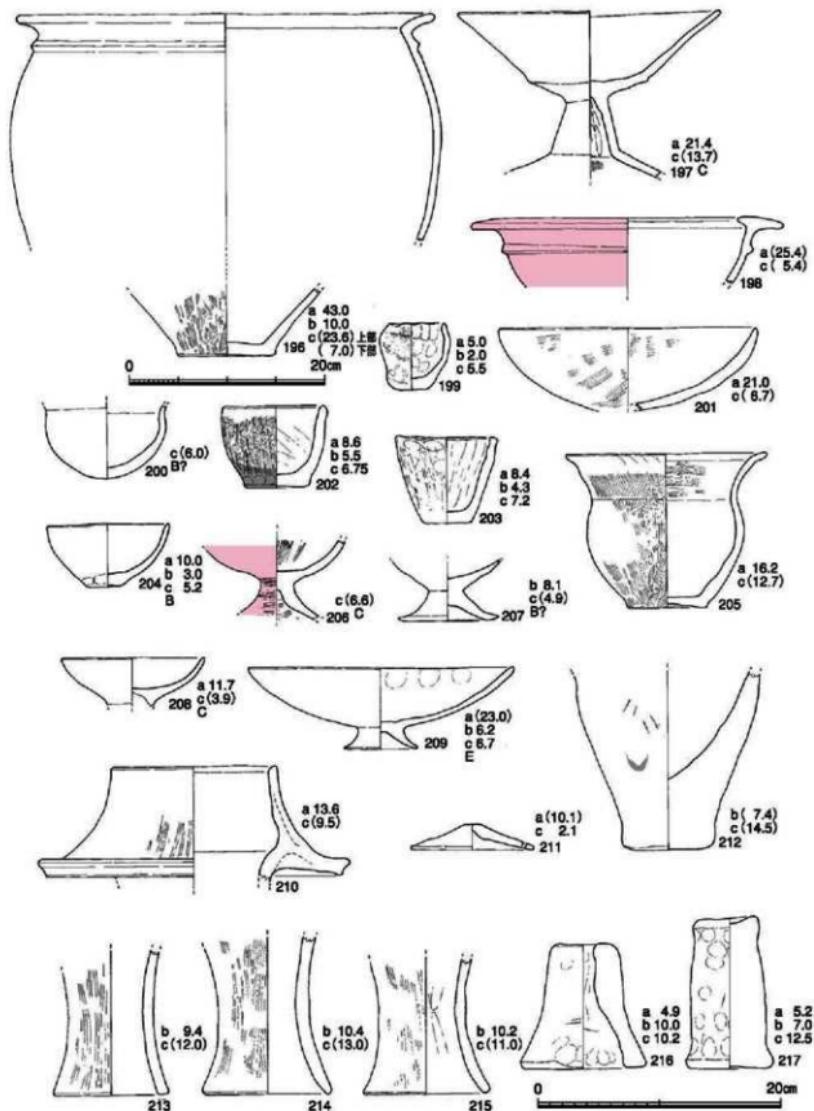


Fig. 22 包含層出土土器③ (1/4・1/5) ※196は1/5、他は1/4

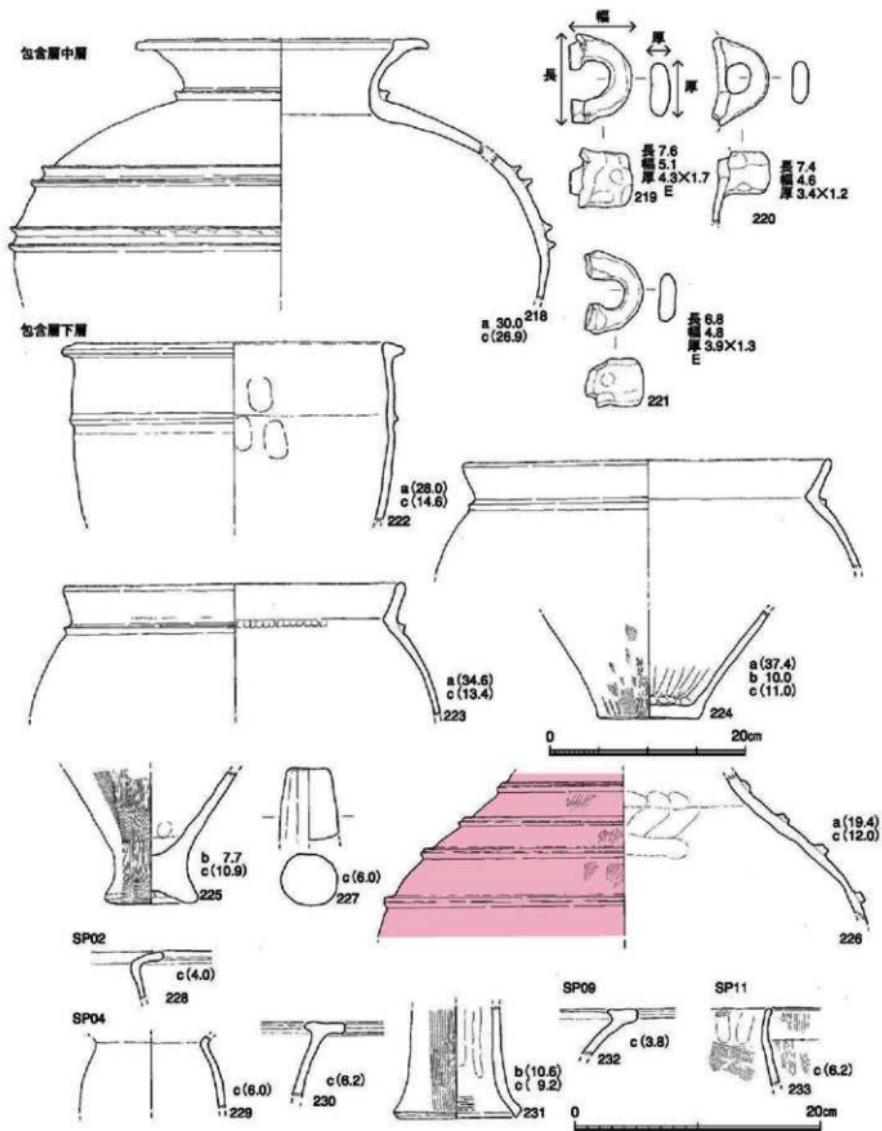


Fig. 23 包含層出土土器④ (1/4・1/5) ※218・224は1/5、他は1/4

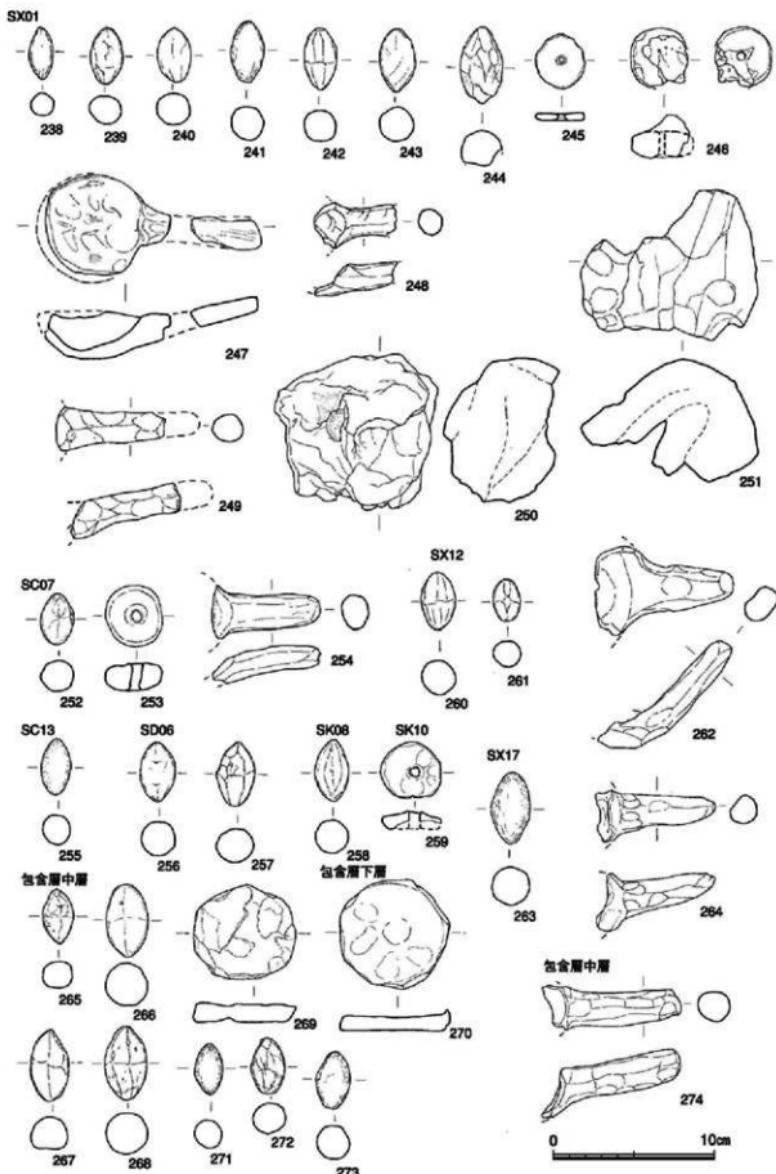


Fig. 24 各遺構出土土製品 (1/3)

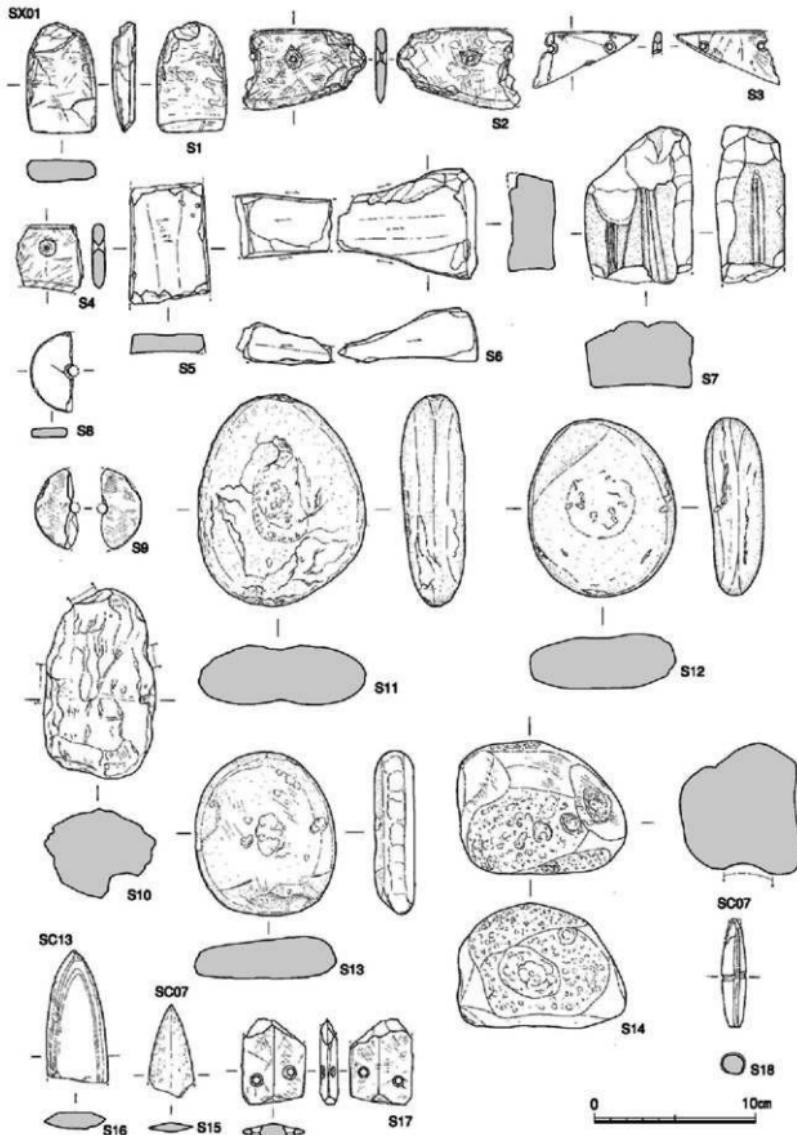


Fig. 25 各遺構出土石器① (1/3)

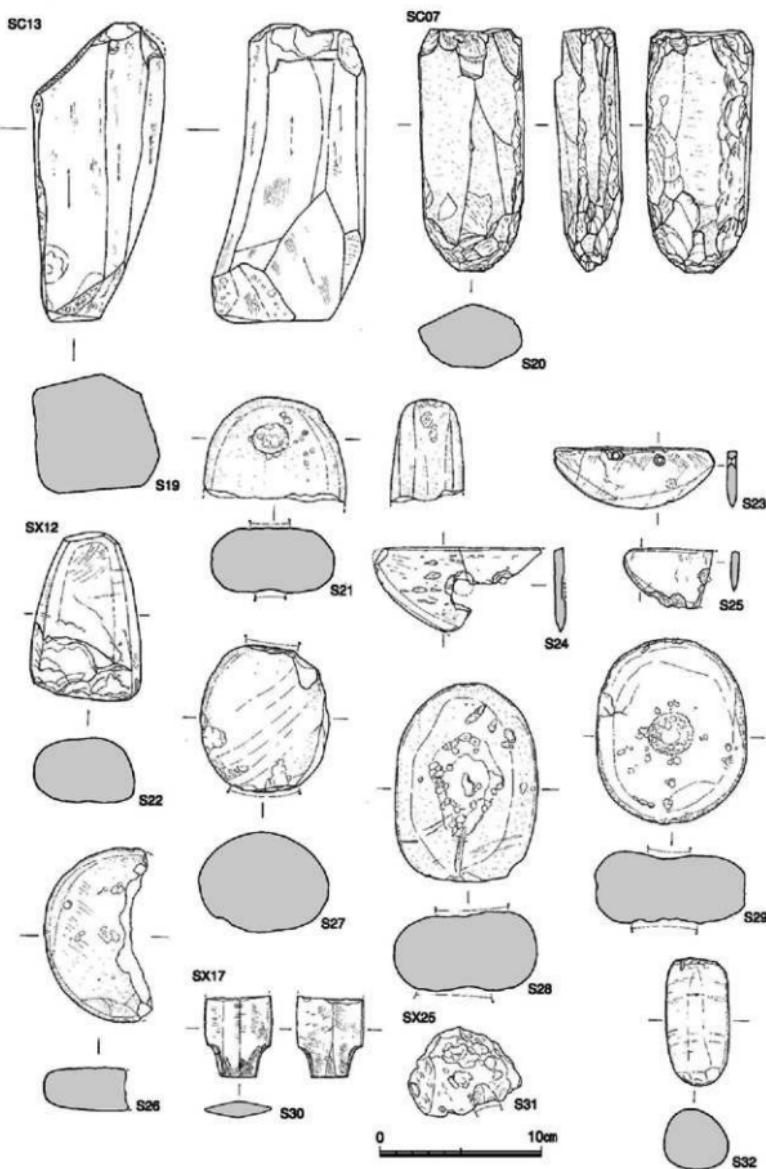


Fig. 26 各遺構出土石器② (1/3)

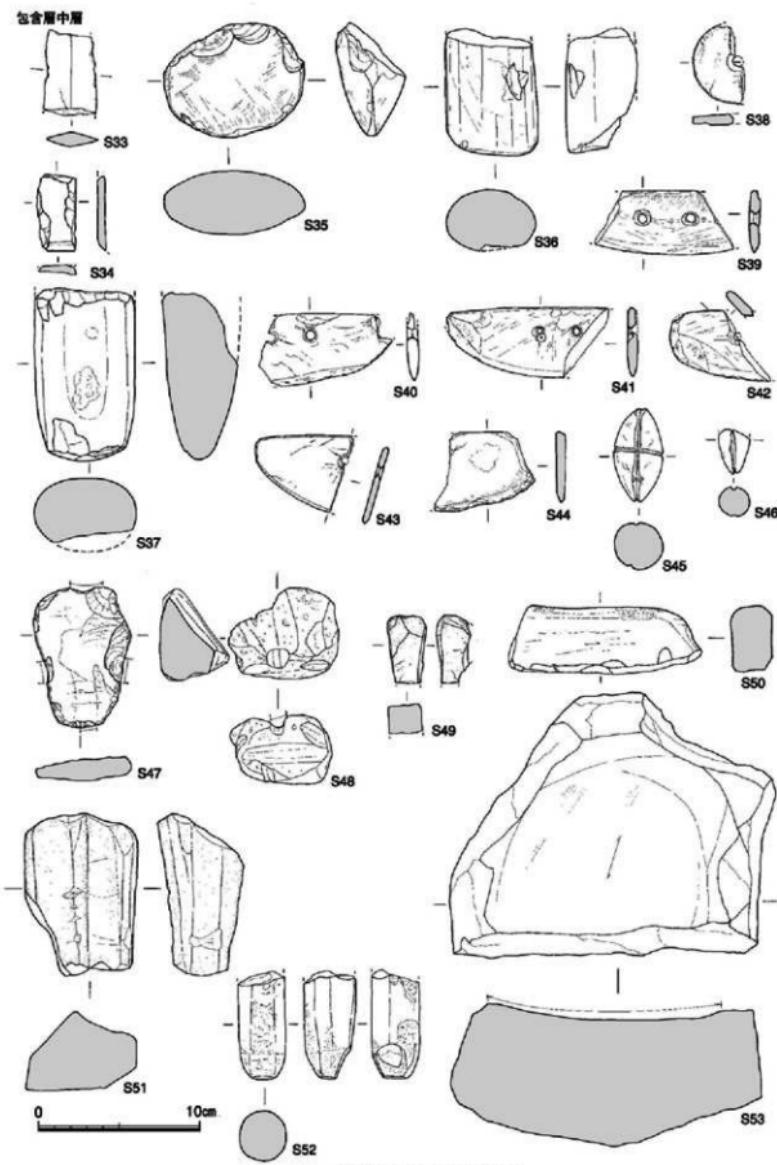


Fig. 27 各遺構出土石器③ (1/3)

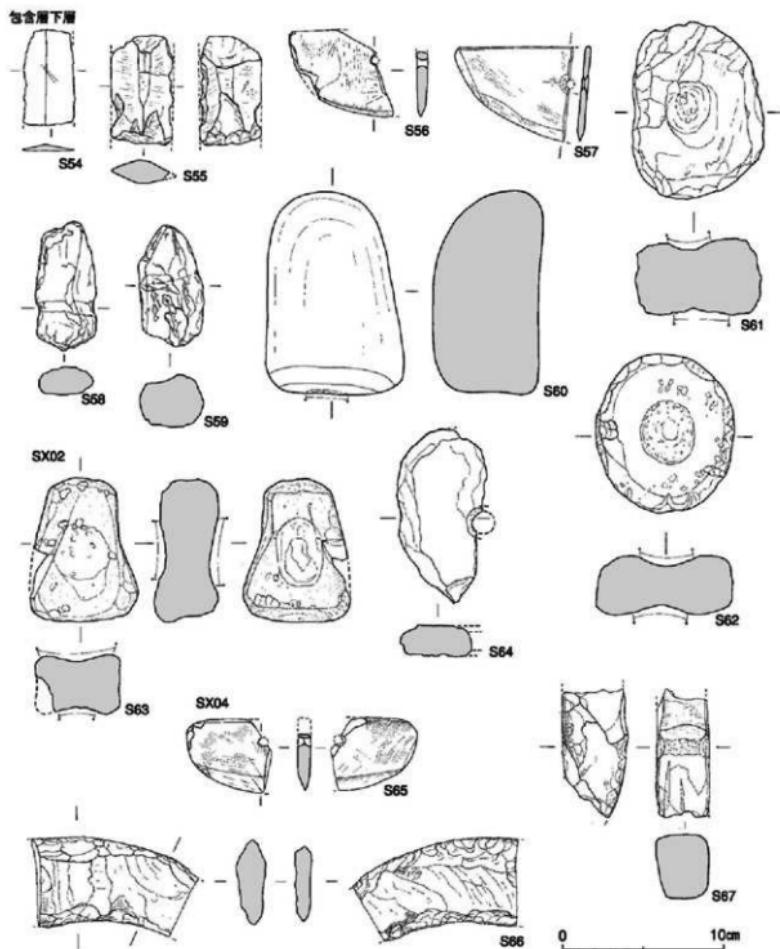


Fig. 28 各遺構出土石器④ (1/3)

下両面中央に截打使用の痕みと、側面にも截打痕が残る。

③包含層 (Fig.20~23・24・25・27・28, PL10)

第2面下包含層中層・下層について報告する。中層は弥生時代中期中頃から古墳時代前期初迄、下層は弥生時代中期前半から後半迄のものが多い。弥生時代後期前半から中頃が少なく、遺構の断絶時期があるのか。

中層出土遺物 168～177は古墳前期初頭。168は直口気味の小型丸底壺。外面ハケメ後ナデ、口縁はミガキ。内面はハケメとナデ。169は広口の小壺。摩滅するが、内面ハケメとナデ。170は直口壺。ナデで内面粘土帯痕が残る。171～172は中型の壺でいずれも表面は摩滅するが、171は内面にハケメが、頸部に172には外側ハケメが残る。173は吉備系の二重口縁壺。口縁にハケメ工具による沈線が入る。174は庄内系の加飾二重口縁壺口縁。竹管文と櫛描波状文が入る。175は二重口縁の口頸部。頸部にハケメ工具による小口部の斜め刻目が付く。176は大型の二重口縁壺。調整はナデとハケメ、胴外面叩き。西部瀬戸内又は、四国系か。177は山陰系の鼓形器台か。外面ナデ、内面横ハケ後ミガキ。技法が粗雑でV様式系工人の模倣品。178～190は弥生土器の壺。178～179・180は弥生後期終末頃。179は頸部に突帯が付く。調整は内外面ハケメとナデ。180は長胴で、調整は外側ハケメ。181・182は小壺。調整は内外面ハケメ。181は弥生中期頃で、口縁端部は打ち欠き、摩滅するがナデ。182は外側丹塗りの無頸壺。口縁部打ち欠き。ナデ調整。183は丹塗り壺の口縁部片。外反する口縁部で、内外面丹塗り。184・185は丹塗りの袋状口縁壺。185は頸部に5条突帯が巡る。調整はナデ。186は頸部にM形突帯が巡り、口縁が僅かに逆し字形を呈す直口壺。外側丹塗りで、調整はナデ。187～190は弥生中期中頃～後半の鋸先口縁の広口壺。187・188は弥生中期後半で、頸部中央に1条三角突帯が巡る。調整は187がナデ、188はナデで、外側縁ヘラミガキ。189・190は頸部境に1条の三角突帯が巡る。189は外側丹塗りで調整はナデ。190は大型で、胴部の膨らみは大きい。調整はナデ。191～196は甕。191は古墳前期初頭で、外側ハケメ、内面はナデ。192はV様式系の壺で、底部は僅かに平底。内外面ハケメ。193・194は弥生中期中頃～後半の鋸先口縁。194には口縁下に三角突帯が付く。調整はナデ。195は口縁が内傾する丹塗り甕。口縁外側はヘラミガキ。196は弥生中期後半の大型甕。口縁直下に三角突帯が巡る。調整はナデで、底部外側はハケメ。197は古墳前期初頭の庄内系高坏。器表面は摩滅するが、ハケメとナデ。198は弥生中期後半の丹塗り高坏。調整はナデ。199～205は鉢。199は手捏ねのミニチュア土器。200は口縁が外折する。調整はナデ。201は大型の浅鉢。調整はハケメとナデ。202・203は弥生後期の平底鉢。202は完形で、外側ハケメ、やや粗製。内面はナデ。203は完形で、調整はハケメと板ナデ。204は内湾する口縁で完形品。上底気味の平底で、調整はナデ。V様式系で古墳初頭。205は広口壺に近い鉢か。調整はハケメとナデ。206～209は脚台付鉢。206は古墳初頭庄内系小形塊状高坏。丹塗りで、調整は細かいヘラミガキ。207は脚部。精緻な作りだが、製塙土器か。208は古墳初頭の小形塊状高坏の坏部。調整はナデ。209は古墳前期初頭の山陰系の撇入品で、表面は摩滅する。210は弥生中期後半の筒形器台。外側ヘラミガキ、内面はナデ。211は弥生中期後半の小型の蓋。調整はナデ。212は厚手の鉢形土器。内面には黒漆のような付着物が付く。外側工具ナデ。213～215は弥生中期後半の両端が外反する器台底部。調整は外側ハケメ、内面はナデ。216・217は支脚。216は中空で、調整はナデ。217は中実で完形。指押えナデ調整。218は鋸先口縁の大型壺。頸部と胴部上半に突帯が巡る。器表面は摩滅するがナデ。219～221は山陰系輪形土器の把手。直径は7.6cm・6.4cm・7.4cmを測る。摩滅するが指押え仕上げ。ただし220は山陰系把手付壺又は韓半島系の模倣品の可能性があり、内面はケズリ調整。

265～268は土製投弾。長さ3.5～4.6cmを測る。やや摩滅するがナデ仕上げ。269は土器片を打ち欠いた土製円板。径5.9×6.4cm、厚さ1.1cmを測る。274はサジか杓子の柄。指押え仕上げ。

S33は磨製石剣片。残存長5.2cm。S34は扁平片刃石斧。欠損、傷みがひどい。S35～S37は磨製石斧。S35は刃部片。S36は基部。S37は刃部片で残存長10.6cmを測る。割れ口面には二次加工痕が見られ、刃部は使用で潰れている。S38は滑石製鉤車。残存径は4.3cm。S39～S44は石庖丁片。S39の紐孔間長は3.0cm。S40～S43は紐孔が1か所残る。S44は未製品片か。S45～S47は漁労具。

S45・S46は有溝石錐。S45はほぼ完存で、十字に溝が入る。全長5.8cm、最大径2.9cm。S46は残存長2.7cm。S47は扁平な打欠き石錐。上下、両側面に紐掛けの抉りを入れる。全長8.65cm、最大幅6.0cmを測る。S48は軽石の浮子か。かなり難に擦っている。S49～S51は砥石片。S49は小形片。S50は残存長11.9cmで、上下両面が使用面。S51は粗い砥石。残存長10cm。1面が使用面。S52は敲石か。基端は欠損で残存長6.7cm、径2.8×3.1cmを測る。表面は擦りと敲打痕が残る。椎の可能性がある。S53は石皿か大型砥石か。残存長16.3cm、幅20.3cm。上面が使用面。S60は磨石。全長12.5cmを測る。表面は使用・摩滅でツルツルする。

下層出土遺物 222～225は甕。222は弥生中期初頭城ノ越期の甕。調整は丁寧な横ナデ。223・224は弥生後期初頭の甕。223はやや摩滅するがナデ。224は口縁と底部。器表面は摩滅するがナデ調整。225は上底の底部。弥生中期初頭もの。外面ハケメ、内面ナデ。226は中期後半の大型甕胴部。4条のM字突帯が巡る。227は中実の支脚。調整は丁寧な面取りナデ。

270は土製円板。土器底部の再利用。縁辺を打ち欠きしナデ調整。271～273は土製投擣。長さ3.2～3.7cm。丁寧なナデ仕上げ。

S54は磨製石剣片。S55は包トレチ出土。石剣未製品の一部か。S56・S57は外湾刃半月形の石庖丁片。S58は滑石製石錐。全長7.9cm。4か所紐掛けの抉りがある。S59は軽石の浮子か。全長7.6cm。

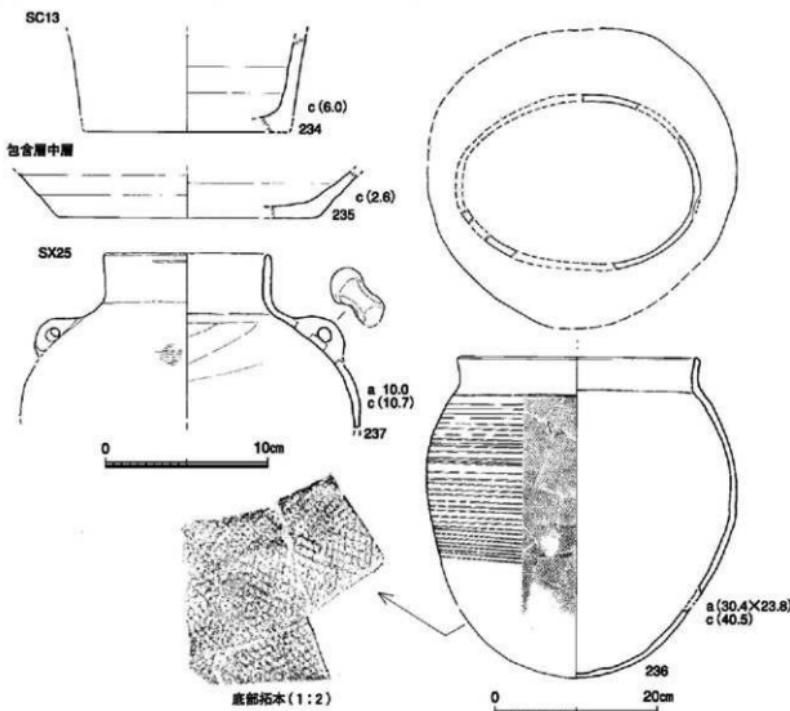


Fig. 29 各遺構出土朝鮮半島系土器 (1/3・1/6) ※236は1/6、他は1/3

S60は磨石兼敲石。S61・62は凹石。上下両面に敲打使用による瘤みがある。

④ピット・搅乱等出土遺物 (Fig.23-29)

第2面と第3面でピットを検出した。柱根が残るものもあり、建物が存在した可能性がある。

228はSP02出土で弥生中期後半の甕口縁細片。229～231はSP04出土。229は甕か壺の胴部片。

230は弥生中期中頃の輪先口縁壺片。231は筒形器台底部。外面ハケス、内面ナデ。232はSP09出土。弥生中期後半の輪先口縁壺細片。233はSP11出土の口縁部。内外面ハケメ。

S63・S64は搅乱SX02出土。S63は凹石で全長8.8cmを測る。表面は磨りと敲打による瘤みがある。S64は滑石製石錐片。中央に円孔がある。側縁は雑な仕上げ。S65～S67はSX04搅乱出土。外湾刃半月形に近い。S66は柱状片刃石斧片。表面は傷みがひどい。S67は打製石錐片。刃部は二次調整で作り出しが刃の角度は鈍い。

⑤各遺構出土朝鮮半島系土器 (Fig.29, PL.9)

234・235はいずれも器面の磨耗が激しいが、胎土が泥質であること、器面の残っている部分でクロ回転によるナデが観察できることから、楽浪系土器であることがわかる。234はSC13出土で、筒杯と思われる。底部は剥離が激しく、糸切り痕は確認することができない。底部の直径は約13cmに復元することができる。235は包含層中層から出土した。平底の盆（大鉢）と思われ、底部の直径は、20cm前後に復元することができる。

236は包含層中層から出土したもので、胴部最大径より上が極めて焼け歪みの大きな短頸壺である。器高は40.5cmあり、口縁部は長径30.4cm、短径23.8cmである。口縁部は直立気味に伸び、胴部はあまり張らず、卵形を呈する。胴部外面にはまず凹部の一辺が1mm前後の細かい正格子タタキを施した後、密に螺旋状沈線を巡らしている。底部には一辺2mm程度の斜格子タタキが施されていて、胴部の細かい正格子タタキや沈線を切っている。また、内面はナデで仕上げられており、当て具の痕跡などは窺えない。口縁部が立ち上がり気味に伸びる短頸壺は原三国から三国時代初頭の忠清道地域に比較的多く見られることから、当資料も忠清道に系譜が求められるものと考えられる。

237はSX25から出土した。口径10.0cm、残存高10.7cmの両耳付壺で、胴部の張りの割には口縁部が縮まる形態を呈する。胴部にはヨコハケを施したあと、口縁部から肩部にかけてヨコナデを施し、ハケメを消している。また、胴部内面にはやや右上がりの横方向のヘラケズリは、頸部の下まで施されている。そのため、胴部の器壁は3mm程度と薄い。耳は肩部の両側についている。接合方法は、肩部に上下2か所に孔を穿ってからそこに粘土紐を環状にしたものを探し、外側はナデ付けている。その後、棒状の道具で耳の横方向の孔を整えている。なお、この土器は耳の孔が横方向に穿たれることから、原三国から三国時代初頭にかけて嶺南地方に分布する両耳付壺の耳を採用し、古式土器器の技法で製作された折衷土器であることがわかる。

(4) まとめ

今回の調査のまとめを行う。遺構の時期は大きく3期に分かれる。第1期はSK9-10とSX12で、弥生時代中期後半頃～末頃。第2期は堅穴住居跡SC07-13・16、SX17、SK26・27などで、弥生時代後期終末～古墳時代前期。第3期は整地面SX01、SD05・06などで、古墳時代後期である。包含層は弥生時代中期前半から古墳時代前期初頭までの遺物を含んでいた。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての多量の外来系土器や、少数ではあるが朝鮮半島系土器が出土しているが、これは比叡遺跡の持つ特色であろう。今回出土した小形彷彿鏡は比叡遺跡群で初めてであった。また把手付壺形土器も類例が少ない貴重なものであった。

最後に今回の報告の作成に際し、多くの方々の協力を得た、末尾ではあるが感謝の意を表したい。

第IV章 考 察

1 把手付壺形土器

F-8区包含層下層で出土した異形の壺形土器。高さ9.4cm、最大幅14.4cmをはかる。口縁の一部を欠くが、全形を復元できる。黄褐色で精良な胎土に雲母の微粒を含む。焼成は堅緻である。

正面から見ると逆台形の胴部に直口縁の小壺が載っており、さらに逆台形の頂部から派生する把手によって両者はつながっている。逆台形の胴部正面に円形に剥離した箇所がみられる。

把手は、一見シンメトリックに見えるが、左右を比べると本来、左側の把手には棘状に派生した突起が3箇所以上あったことがわかる。これにたいして右の把手は、意識的に丸味をもって表現されている。

さて類例として、逆台形および皮袋形の胴部をもつ土器は、福岡市と周辺では唐原、雀居、井尻B、赤井手の4遺跡で出土しており、いずれも皮袋形土器と報告されている(註1)。時期は唐原例が、包含層出土のため時期幅を見込む必要があるが、それ以外は古墳時代前期に比定される。

比叡の例は、胴部が逆台形で底部が平坦である点は唐原例と共通するものである。呼称については、把手の突起が嘴と鷦鷯を象徴したと解釈すると鳥形土器という表現がふさわしい。ともかく皮袋形土器とは区別すべきであろう。共伴遺物から、当該資料の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭に比定される。

逆台形の胴部をもつ土器は、韓国においても出土している。寺井誠氏によれば、韓半島南西部の忠清南道、全羅道、京畿道、江原道で確認されており、鳥形土器と記されている。今回報告する土器の韓半島出土資料との関連性については、類例の増加によって系譜が明らかになることを期待したい。

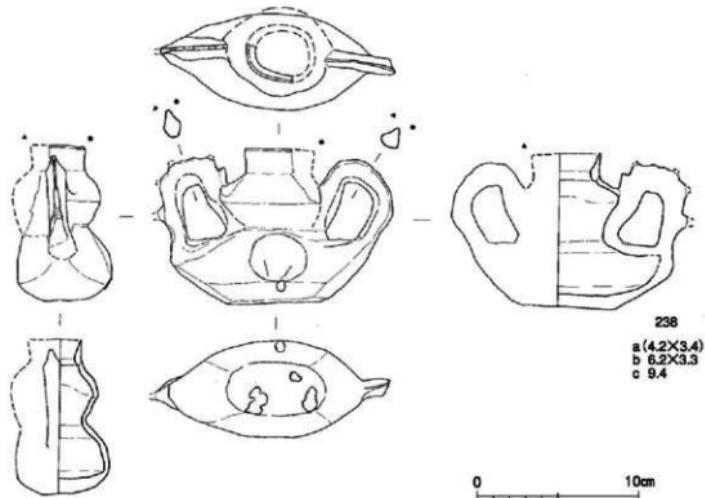


Fig. 30 包含層出土把手付壺形土器 (1/3)

遺跡名	遺構	型式	時期	文献
唐原遺跡	包含層	逆台形	弥生後期～古墳	小林(編)1989
雀居遺跡群	1号溝	皮袋形	古墳前期	松村2000
井尻B遺跡14次	19号井戸	皮袋形	古墳前期	屋山2003
赤井出遺跡	18号住居跡	皮袋形	古墳前期	丸山(編)1980

福岡市と周辺出土の台形の胸部をもつ土器

註1 皮袋形須恵器は除外する。

【文献】

小林義彦(編) 1989 「唐原遺跡 II」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第207集」 福岡市教育委員会

丸山康晴(編) 1980 「赤井手遺跡」 「春日市文化財調査報告書 第6集」 春日市教育委員会

松村道博 2000 「雀居遺跡 5」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第635集」 福岡市教育委員会

屋山 洋 2003 「井尻B遺跡 11」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第736集」 福岡市教育委員会

2 小形仿製鏡

内行花文帯を主文様とする小形仿製鏡。II区の現代基礎の搅乱から出土した。面形は、6.85～6.92cmで、重量73.94gをはかる。鋳上がりは良好で、調査時の欠損部分からは赤銅色の地肌がのぞく。

鏡縁から鉢に向かって三つの円圈をもつ。鏡縁と外側の円圈との間を等間隔の櫛齒文で充たし、中間の円圈から7条の弧線によって表わされた花文帯が派生する。鉢をめぐる内側の円圈は、型持ちのためか鉢孔の延長部で途絶えている。

湯口は、鏡縁端部の外側にせり出す感触に、櫛齒文と弧文の鉢崩れが対応することから押図の三時の位置と推定される。

鏡面はゆるい凸面を呈し、研磨は丁寧ではない。一時の位置から中心にむかうわずかな隆起は、鉢型のひびに起因するものであろう。鏡面は押図の九時から十二時の位置に鬆が集中して認められる。

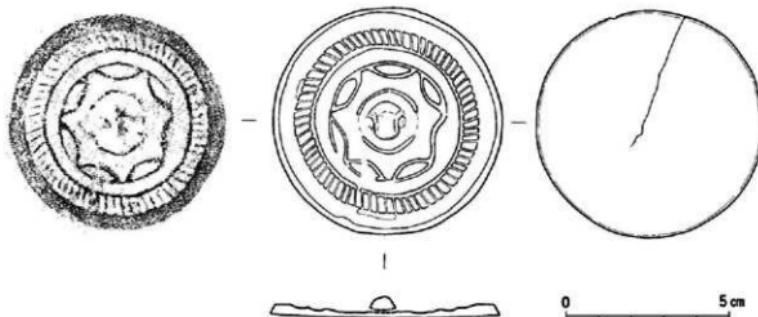


Fig. 31 小形仿製鏡実測図 (2/3)

図 版 PLATES



包含層遺物取り上げ作業風景



(1)第1面 I 区全景(北から)



(2)SX01(北西から)



(1) SX01近接(北西から)



(2) SX01遺物出土状況(西から)



(1)第2面 I 区全景(南から)



(2)調査区北側(東から)



(1)第3面I区全景(南から)



(2)II区全景(南東から)



(1)第3面Ⅰ区北側(南から)



(2)SC07・16(北東から)



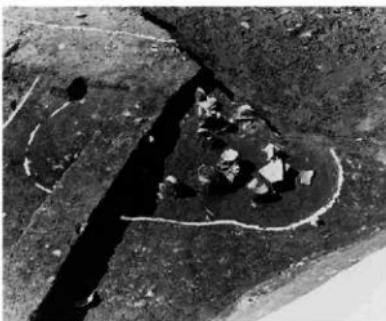
(1)SC13(東から)



(2)SX12・17(北東から)



(1)SC16(西から)



(2)SK14(南西から)



(3)SK08(北西から)



(4)SK09(北から)



(5)SK10(南から)



(6)SK26・27(東から)



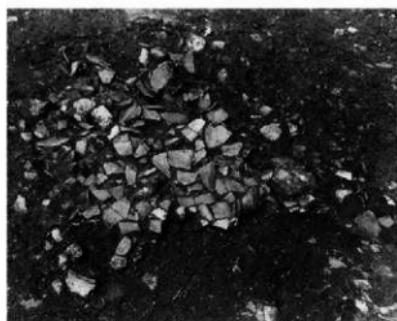
(1)SX12(東から)



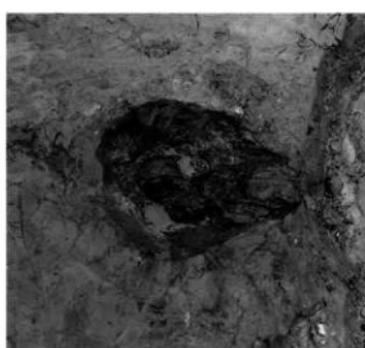
(2)SX12遺物出土状況(南東から)



(3)SX25(北から)



(4)SX25土器出土状況(西から)



(5)柱穴SP06柱出土状況



(6)SX12土器出土状況



(1) I 区北壁土層(南から)



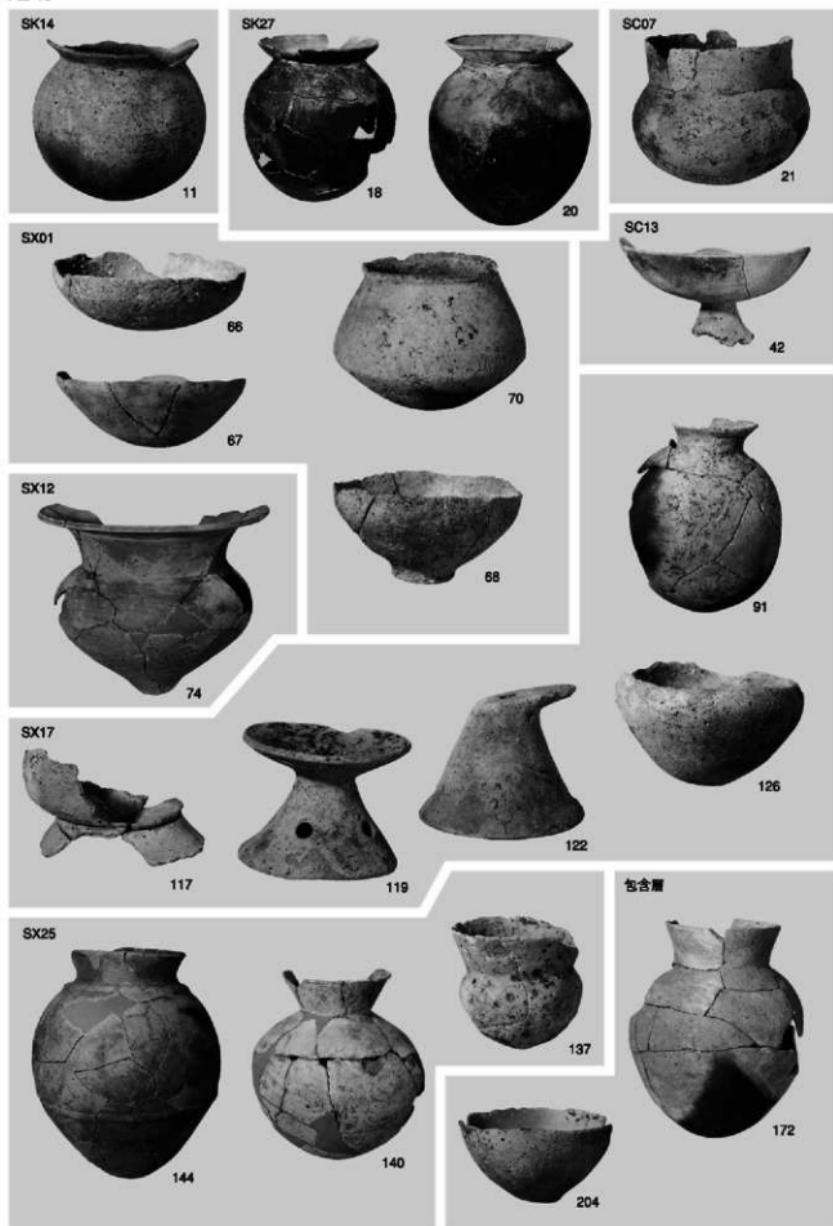
(2) SC13南壁土層(北から)



(3)各遺構出土朝鮮半島系土器



(縮尺不統一)



各遺構出土土器

(縮尺不統一)

報告書抄録

ふりがな	ひえよんじゅうに						
書名	比恵42						
副書名	比恵遺跡群第91次調査報告						
巻次							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	898						
編著者名	山崎龍雄/寺井誠/常松伸雄						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	西暦2006年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°	日付	
ひえよんじゅうに 比恵遺跡群 第91次調査	福岡市博多区博多駅南4丁 目168番1・2	40132	0128	333454	1302536 20040401 ～20040604	378	共同住宅建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
比恵遺跡群第91次調査	集落	弥生時代、古墳時代	弥生時代・土坑2+柱穴+包含層 +土器群/古墳時代・竪穴住居跡 3+土坑+溝2+整地面	弥生時代・弥生土器+土 製品+手付彫形土器+ 石器+鏡1/古墳時代ー 土師器+須恵器	弥生時代中期から古墳時代 前期の包含層と、竪穴住居跡、 古墳時代後期の整地面		
要約	調査区は比恵遺跡群の北側に位置する。当初谷部に堆積した包含層を調査する予定であったが、調査の結果、弥生時代中期から古墳時代後期にかけての3層の遺構面を検出した。各遺構面の時期は第1面は古墳時代後期、 第2面は弥生時代末から古墳時代前期前半、第3面は弥生時代中期から後期である。各面の主な遺構は第1面は 整地面、第2面は竪穴住居跡、第3面は土坑や陶器土器群と包含層である。谷部の包含層を中心にパンコンテ400 箱近くの多量の土器が出土した。遺物の時期は弥生時代中期初頭から古墳時代初頭までである。特筆すべきこととして、多数の外来系土器とともに、珍しい手付彫形土器や小形彷製鏡、朝鮮半島系の土器が出土していることである。また本調査区は比恵遺跡で検出されている古代初めの大型建物群地域に近く、谷部上面に敷詰めた整地はそれに関連する可能性がある。						

